



## — 報 告 書 —

開催日：令和3年11月27日（土）

会 場：オンライン開催

主 催：文部科学省／日本ユネスコ国内委員会

共催：NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム／国立大学法人宮城教育大学

協力：公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター／公益社団法人日本ユネスコ協会連盟／  
日本出版クラブ／民間教育研究所連盟

協賛：カシオ計算機株式会社、株式会社ファーストリテイリング、株式会社三菱 UFJ 銀行

後援：外務省、環境省、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、  
全国国公立幼稚園・こども園長会、日本私立大学協会、（一社）日本私立大学連盟、  
日本私立中学高等学校連合会、日本私立小学校連合会、全日本私立幼稚園連合会、  
（公社）日本 PTA 全国協議会、全国国立大学附属学校連盟、（一社）国立大学協会、  
ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUivNet）、ESD 活動支援センター、  
日本 ESD 学会、（株）教育新聞社

# 目 次

|                         |    |
|-------------------------|----|
| ◆総括                     | 3  |
| ◆実施概要                   | 6  |
| ◆告知                     | 7  |
| ◆大会日程                   | 8  |
| ◆開会挨拶                   | 9  |
| ◆基調提案・パネルディスカッション       | 12 |
| ◆企業が行う教育支援や社会貢献に関する情報提供 | 32 |
| ◆ユネスコスクール地方ブロック大会からの報告  | 35 |
| ◆文部科学省からの施策説明           | 39 |
| ◆特別座談会                  | 46 |
| ◆研究協議会                  | 60 |
| ◆ESD 大賞表彰式・閉会式          | 63 |
| ◆アンケート結果                | 65 |

# 総 括

持続可能な社会の創り手を育む教育（ESD）の推進に向けて、第13回ユネスコスクール全国大会・ESD研究大会（文科省、日本ユネスコ国内委員会主催）が2021年11月27日、オンラインで開催された。

日本のユネスコ加盟70周年を記念した特別座談会が行われ、気候変動問題などの世界的な課題に対して主体的に行動していく子供たちを育てるために、今こそESDやユネスコスクールの真価が問われていると、登壇者から期待を込めたエールが送られた。

前回大会に引き続き、新型コロナウイルスの感染防止対策の観点からオンラインで開かれた第13回大会は、約300人がYouTubeから各プログラムを視聴。

開会式にビデオメッセージを寄せた末松信介文部科学大臣は「今、人類は、新型コロナウイルス感染症との戦いに加え、気候変動、生物の多様性や天然資源枯渇など地球規模の課題に直面している。これらは地球上の誰もが避けて通ることのできない、人類一人一人が抱えている課題だ。『自分たちが社会の課題にコミットしなければ、自分たちの未来が脅かされる』という危機感は、先だって行われたCOP26においても各国のリーダーから表明された。世界的な課題を『自分事』として捉え『持続可能な社会の創り手』の育成を行うESDは、世界の標準となっていく教育と言える」と、ESDの意義を強調した。

このほか、開会式では、濱口道成・日本ユネスコ国内委員会会長、村松隆・宮城教育大学学長（宮城会場の代表）があいさつを行った。また、日本ユネスコ国内委員会広報大使のさかなクンから特別メッセージが送られた。

午前中のプログラムは、宮城教育大学とつないでのパネルディスカッション。「大震災から明日を拓く教育の在り方を探るービフォー311・アフター311から学ぶ」をテーマに、東日本大震災の発生から10年を迎えたことを受け、ユネスコスクールにもなっている宮城県気仙沼市の公立小学校の教員らが登壇し、地域と連携した避難訓練や教科の中で取り組む防災教育の実践の成果、次世代への記憶の継承に向けた課題などを報告。ESDと連携させた防災教育の未来像を話し合った。

パネルディスカッションを始めるにあたって、基調講演を行った市瀬智紀・宮城教育大学教授は、東日本大震災発生当時から現在までの動きとして、ドイツをはじめとする世界各国のユネスコスクールから被災地にメッセージが届いたことや、震災後に世界各地に防災教育を発信する取り組みが広まったことを指摘。気仙沼市立階上（はしかみ）中学校では、震災の記憶を継承するために、生徒が地域住民から当時の話を聞いたり、震災遺構でのボランティア活動を行ったりしている取り組みなどを紹介した。

パネルディスカッションでは、気仙沼市立気仙沼小学校で防災主任をしている畠山三弘教諭が、宮城教育大学の教職大学院で研究している防災教育の課題について報告。「子供たちの心を揺さぶり、地域を支えようという意識を育てることが大切だ。いつ大規模な災害が来るか分からない中で、最も大切な備えは、地域を支える人づくりだと考えている」と、震災の記憶の継承や、地域で防災に取り組む人材育成に向けた視点を解説した。

また、東日本大震災を宮城県南三陸町立名足小学校で経験した気仙沼市立大谷小学校の榎木（かやき）千枝教諭は、想定外の津波が来たことで児童らと共に高台へと避難したエピソードを語った。その上で榎木教諭は、震災後に教員らで制作した「防災学習シート」の取り組みや、幼稚園・中学校・公民館が連携して行う合同避難訓練について紹介。合同避難訓練では「10分以内に避難することを目指して訓練しているが、実際の津波からの避難では、避難した後にはかなり長い時間をその場で過ごさなければいけない。今後の課題として、中学生と小学生、幼稚園が普段から交流し、顔見知りの関係をつくっておくことも大事だと思って

いる」と指摘した。

震災当時は名足小学校の6年生で、現在は榎木教諭と同じ大谷小学校で勤務している三浦美咲教諭は、宮城教育大学での防災教育の学びを生かした4年生の社会科の授業実践を発表。その実践では、タブレット端末を家庭に持ち帰り、防災バッグの中にどんなものが入っているかを撮影してきて授業で共有したり、学校にある市の防災倉庫に入り、どんな防災用品がどれくらい備蓄されているかを確認したりして、子供たちが防災を自分事として捉えた後、同校の校長になったと想定し、「災害が発生し300人が避難している中に、200人分の弁当が届いたら、すぐに配るべきか」といった問題を子供たちでディスカッションを行った。

三浦教諭は「震災当時の経験や大学での活動などから、備えの重要性を感じている。すぐそばに備えはあるのに、子供たちは知らないのが現状だ。まずは学校で災害への備えが身近にあることを学ばせ、日頃から災害への備えに触れさせて、社会の一員としての自覚を育てることが、未来への備えにつながっていく」と話した。

いま、ユネスコスクールで防災教育に取り組んでいる3人の高校生である、宮城県気仙沼高等学校1年の小松美咲さんと末永詩真さん、宮城県気仙沼向洋高等学校1年の阿部蓮さんがビデオで登場し、どのような活動に取り組んでいるかを発表した。

東京の会場から教員らの話に耳を傾けていた前宮城教育大学学長の見上一幸・尚絅学院大学特任教授がパネルのまとめとして、「先生方がされている防災教育は決して無力ではない。（震災直後に）『宮城教育大学附属小では防災教育をしていたが、その成果はどうか』と聞かれ、『震災があまりにも大きく、震災の前には教育も無力だ』と返事をした。ところが、その後で、防災教育でやったことの一つ一つが子供たちの行動に表れていたと附属小の先生から聞いた。どんな小さなことでも、防災教育は子供たちに生きる」と強調し、ESDやユネスコスクールと連携した防災教育の効果に期待を寄せた。

午後の部では、日本のユネスコ加盟70周年を記念して「わが国におけるユネスコの功績、SDGs達成に向けての役割」と題する特別座談会が行われた。日本ユネスコ国内委員会教育小委員会委員長の杉村美紀・上智大学総合人間科学部教育学科教授による司会進行のもと、ユネスコスクールの実践とESDの可能性について、関係者が意見交換した。

前日本ユネスコ国内委員会会長である安西祐一郎・慶應義塾大学名誉教授は、平和の実現を求めた戦後の日本社会がユネスコの理念に共鳴し、さまざまな活動が展開されてきた歴史的経緯を振り返り、「ユネスコの活動が戦後間もなく、熱気にあふれて始まった当時をわれわれは共有しないといけない」と呼び掛けた。

その上で「子供たちには、これからも平和な時代に暮らしてもらいたい。子供たちが元気に、日本の津々浦々、そして世界で活躍してほしい。そのためのリベラルアーツの素地として、ユネスコスクールはあるのではないか」と期待を寄せた。

日本ユネスコ国内委員会広報大使の末吉里花・エシカル協会代表理事は、ユネスコスクールに加盟している東京都大田区立大森第六中学校の授業を視察したときに印象的だったこととして、あらゆる教科で気候変動や持続可能な暮らしといった、世界の課題と関連付ける実践が行われていたことを紹介。「こうしたESDの学びが教室を飛び越えて、家庭や地域に及んでいくのだろう。子供が地域に発信することで地域が変わり、温かな循環が生まれるという希望を感じた」と高く評価した。

一方で末吉氏は、気候変動について、日本の大人たちの問題意識は低いと指摘。「課題の解決のために真剣に頑張っている若者が、自信を持って活動に邁進（まいしん）していけるような環境を整えてあげる必要がある。本気になっている大人が身近にいと子供たちに実感してもらえるように、ロールモデルとしての教師の役割は大きい」と強調した。

市内の全ての公立小中学校がユネスコスクールに加盟している福岡県大牟田市教育委員会の安田昌則・前教育長は、ユネスコスクールを核としたまちづくりについて説明。「学校では、ESD によって教育活動が充実し、自分の考えで行動する子供が増えた。地域では多様な団体が重層的に連携している。特に最近は、ESD を経験した中学生が、これを次世代に継承したいと、本市の教員として着任したのはうれしかった」と、長年の取り組みの成果を報告した。

大会ではこの他に、企業が行う教育支援や社会貢献に関する情報提供のランチョンセッションや、ユネスコスクール地方ブロック大会・関東ブロックの報告、「ESD 推進による令和の日本型学校教育の構築」「『学び』の先に見える”可視化未来”と自己」「学校の実践、取り組みを評価し、成果を広める」「ユースの活動と国際交流—Voice of Youth Empowerment の事例から」の4つの分科会が設けられ、ESD の実践をもとにした研究協議が行われた。

# 実施概要

- 日 時 令和3年11月27日（日）10:00～17:20
- 会 場 オンライン開催  
※配信基地局は日本出版クラブ（〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-32）
- 対 象 ユネスコスクール関係者（教職員）、一般幼小中高校等教員、 教育行政関係者（教育委員会等）、教育研究等関係者（大学、研究所等）、 教員志望者（教職課程の学生等）、ユネスコ活動関係者、 その他、SDGs 達成に向けた人材育成や ESD に関心のあるステークホルダー（企業、報道関係者、NPO・NGO 等）
- 参加者 申込者数 748 名、アーカイブ動画視聴回数(令和4年2月9日時点) 2,731 回
- 主 催 文部科学省／日本ユネスコ国内委員会
- 共 催 NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム／国立大学法人宮城教育大学
- 協 力 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター／  
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟／日本出版クラブ／民間教育研究所連盟
- 後 援 外務省、環境省、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国国公立幼稚園・こども園長会、日本私立大学協会、（一社）日本私立大学連盟、日本私立中学高等学校連合会、日本私立小学校連合会、全日本私立幼稚園連合会、（公社）日本PTA全国協議会、全国国立大学附属学校連盟、（一社）国立大学協会、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）、ESD 活動支援センター、日本 ESD 学会、（株）教育新聞社
- 協 賛 カシオ計算機株式会社、株式会社ファーストリテイリング、株式会社三菱 UFJ 銀行

## ■ チラシ

# 第13回 ユネスコスクール全国大会

## 持続可能な開発のための 教育(ESD)研究大会 ——明日を拓くESD——

**参加費無料**  
 (事務申込料 定員1,000名)  
 ユネスコスクール ESD推進委員会が、  
 どんなでもの提供いたします

**主 催:** 文部科学省・日本ユネスコ国内委員会  
**共 催:** NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム／国立大学法人大宮城高専大  
**協力:** 公益財団法人ユネスコアジア文化センター／公益財団法人日本ユネスコ協会連盟／日本出版クラブ／環境新聞研究所発行  
**協賛:** カシオ計算機株式会社／株式会社アースリサーチデザイン／株式会社三まじり銀行  
**後援:** 千葉県／東京都／佐賀県／山梨県／長野県／新潟県／富山県／石川県／福井県／岐阜県／静岡県／愛知県／三重県／滋賀県／京都府／大阪府／兵庫県／奈良県／和歌山県／鳥取県／島根県／岡山県／広島県／山口県／徳島県／香川県／高松市／愛媛県／福岡県／佐賀県／長崎県／熊本県／大分県／鹿児島県／沖縄県  
**特別協賛:** 公益財団法人ユネスコ・スクール・先進国代表機関／ユネスコ Asia-Pacific / ESD 推進センター / 公益財団法人 ESD 推進委員会

(表)

[illegible]

(裏)



# 大会日程

| プログラム <small>*プログラムは予定です</small> |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |                                                                                |
|----------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------|
|                                  | 第一会場                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |                                                                                |
| 10:00~10:20                      | 開会挨拶                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |                                                                                |
| 10:20~11:50                      | <b>基調提案・パネルディスカッション</b><br><b>「大震災から明日を拓く教育の在り方を探る -ビフォー311・アフター311から学ぶ」</b><br><b>基調提案</b><br>市瀬 智紀（宮城教育大学教授）<br><b>パネルディスカッション</b><br>畠山 三弘（宮城県気仙沼市立気仙沼小学校教諭）<br>榎木 千枝（宮城県気仙沼市立大谷小学校教諭）<br>三浦 美咲（宮城県気仙沼市立大谷小学校教諭）<br>現在ユネスコスクールで防災教育に取り組む現役高校生（動画出演）<br>小松 美咲・末永 詩真（宮城県気仙沼高等学校1年）／阿部 蓮（宮城県気仙沼向洋高等学校1年）<br>司会進行：市瀬 智紀（宮城教育大学教授）<br><br><b>総括</b><br>見上 一幸（前宮城教育大学学長、尚絅学院大学特任教授） |                                                                                |
| 12:00~13:00                      | <b>ランチョンセッション</b> 企業が行う教育支援や社会貢献に関する情報提供<br><b>ユネスコスクール地方ブロック大会からの報告 関東ブロック</b>                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |                                                                                |
| 13:00~13:10                      | 文部科学省からの施策説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |                                                                                |
| 13:10~14:25                      | <b>特別座談会</b><br><b>「我が国におけるユネスコの功績、SDGs 達成に向けての役割」</b><br>安西 祐一郎（前日本ユネスコ国内委員会会長、慶應義塾大学名誉教授）<br>末吉 里花（日本ユネスコ国内委員会広報大使、一般社団法人エシカル協会代表理事）<br>安田 昌則（前福岡県大牟田市教育委員会教育長）<br>司会：杉村 美紀（日本ユネスコ国内委員会教育小委員会委員長、上智大学総合人間科学部教育学科教授）                                                                                                                                                            |                                                                                |
|                                  | 第一会場                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | 第二会場                                                                           |
| 14:40~15:40                      | <b>研究協議会①</b><br><b>ESD推進による令和の日本型学校教育の構築</b><br>コーディネーター：<br>石丸 哲史（福岡教育大学教授）                                                                                                                                                                                                                                                                                                    | <b>研究協議会②</b><br><b>「学び」の先に見える“可視化未来”と自己</b><br>コーディネーター：<br>伊井 直比呂（大阪府立大学教授）  |
| 15:50~16:50                      | <b>研究協議会③</b><br><b>学校の実践、取り組みを評価し、成果を広める</b><br>コーディネーター：<br>棚橋 乾（全国小中学校環境教育研究会顧問）                                                                                                                                                                                                                                                                                              | <b>研究協議会④</b><br><b>ユースの活動と国際交流</b><br>コーディネーター：<br>公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU） |
| 17:00~17:20                      | ESD大賞表彰式・閉会式                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |                                                                                |



## 開会挨拶

### 第 13 回ユネスコスクール全国大会/持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会 開催に寄せて

司会進行：堀尾 多香（文部科学省国際統括官付国際統括官補佐）

#### ◆末松 信介（文部科学大臣）



第 13 回ユネスコスクール全国大会（ESD 研究大会）の開催に当たり、御挨拶申し上げます。

教職員をはじめ学校関係者の皆様におかれましては、日頃より、教育活動に御尽力をいただいていることに加え、この 1 年半以上は、新型コロナウイルス感染症対策を講じながら子供たちの学ぶ場を守って来ていただいたことに、心より感謝申し上げます。

今、人類は、新型コロナウイルス感染症との闘いに加え、気候変動、生物多様性や天然資源枯渇などの地球規模の課題に直面しています。これらは地球上の誰もが避けて通ることのできない人類一人一人が抱えている課題です。「自分たちが社会の課題にコミットしなければ、自分たちの未来が脅かされる」という危機感は、先だって行われた COP26 においても各国のリーダーから表明されました。世界的な課題を「自分事」としてとらえ「持続可能な社会の創り手」の育成を行う ESD は、世界の標準となっていく教育といえます。

本年 5 月に開催され、161 か国 2,800 名が参加した「ESD に関するユネスコ世界会議」を機に、ESD は SDGs の 17 の目標の全ての実現に寄与するものであるとした国際的枠組み「ESD for 2030」が本格的に始動しました。日本が提唱した ESD が世界の教育をけん引することをお大変喜ばしいと思うと同時に、皆様の長年にわたる ESD の取組に改めて感謝する次第です。

国内においては、「持続可能な社会の創り手」の育成が盛り込まれた新学習指導要領の本格実施が始まりました。ユネスコスクールにおける ESD は、学校の ICT 環境を整備する GIGA スクール構想の下、次世代の社会を見据えた取組が行われております。例えば、「持続可能な開発のための国連海洋科学の 10 年」を踏まえ、海洋を題材として国内外の学校同士がオンラインで議論し、子供たちが社会課題の解決に向けて自ら行動に移すなどユネスコネットワークを活用した ESD の取組が実施されていると聞いております。我が国の ESD は、2030 年に向けて新しいフェーズを迎えており、教育再生の核（コア）となることを期待します。

本大会を通して、全国で実践いただいているユネスコスクールの優れた取組や課題に応じた工夫を共有し、教員や ESD に携わる多様なステークホルダーのネットワークが強化され、更なる活動の充実に資することを祈念しております。

#### ◆濱口 道成（日本ユネスコ国内委員会会長）



第 13 回ユネスコスクール全国大会（ESD 研究大会）の開催に当たり、御挨拶申し上げます。

ユネスコスクール関係者の皆様におかれましては、日頃より ESD をはじめとするユネスコ活動の推進に御尽力いただき誠にありがとうございます。

我が国は、本年、ユネスコ加盟 70 周年を迎えました。ユネスコは、

戦後の荒廃の中で、日本が初めて加盟した国際機関です。民間の草の根活動から始まったユネスコ活動は、日本が国際社会への復帰となる希望となりました。それから、70年に渡り、ユネスコが掲げる「国際平和と人類の共通の福祉の促進」のもと、我が国は、教育・科学・文化の多岐に渡る分野において、国内外で着実にユネスコ活動を広げてきました。

気候変動や国際秩序の変化、サイバーテクノロジーなどの急速な進歩に加え、コロナ禍が長期化していることにより、今、人類は激動と混乱の中にあると言えます。このような時こそ、人々が物理的な隔たりを乗り越え、無知・偏見をなくして相互に理解し、連帯・協調することが大切です。「人の心に平和のとりで」を築き、人類の共通の福祉を促進し、持続可能な社会の構築を実現するというユネスコ活動は、困難な時代を乗り越える“世界の希望”になると信じております。

ユネスコスクールは、ユネスコの理念に基づき、時代に合わせて、多様な教育を展開してきました。本年は、東日本大震災から10年の年でもあります。古来、自然災害を多数経験して来た日本は、自助・共助・公助（自分で助ける、共に助け合う、そうして公の助けを待つ）を教育の中で育み、科学への理解が定着していることが、社会の礎になっています。本大会において、災害からの復興にESDの取組やユネスコスクールのネットワークがどのように活用されたかを改めて振り返るとともに、現在の社会的な課題を自分の課題として捉え、「明日を拓くための教育の在り方」へとつなげていく議論が活発に行われることを期待しています。

持続可能な社会を目指し、文部科学省と日本ユネスコ国内委員会がESDの推進拠点と位置付けるユネスコスクールの役割の重要性は、年々高まっています。本大会を通じた、ユネスコスクールネットワークのより一層の活性化を祈念しております。

#### ◆特別メッセージ：さかなクン（日本ユネスコ国内委員会広報大使）



第13回ユネスコスクール全国大会/ESD研究大会にギョ参加の皆様こんにちは。

世界中で地球規模の課題が生じております。海で起きている問題もその一つです。海では、海洋プラスチックごみの問題、温暖化による気候変動、海面の上昇による海洋生物多様性に対する影響など、多くの危機に直面しております。これらは海洋生物の命が脅かされるだけでなく、水産資源の持続可能性を脅かすなど、私たちの日常生活に大きな影響があります。

ユネスコでは2021年からの10年間で「海洋科学の10年」としています。持続可能な開発目標（SDGs）、なかでもSDGsの14番目の「海の豊かさを守ろう」をはじめとして、海洋に関する目標の達成に向け、国際的に特に力を入れる10年とするものでギョざいます。さかなクンのライフワークでもあります“海”が注目されることを心から嬉しく思っております。そして持続可能な開発のための教育であるESDは、まさに地球規模の課題を自分の事として捉えて、その解決に向けて自ら考え行動を起こす力を身に着けるための教育でギョざいます。

ユネスコスクールの皆様、2030年SDGsの達成、そのためのESDの推進のためにも、ユネスコスクールでの取組を各学校で活用することが鍵となります。皆様のギョ活動が更に発展されていくことを願って、さかなクンからのメッセージとさせていただきます。

◆村松 隆（宮城教育大学学長）



第13回ユネスコスクール全国大会（ESD 研究大会）を文部科学省と共に本学において開催させていただきますことに、心より御礼申し上げますとともに、会場校として一言御挨拶申し上げます。

翻ってみますと、第2回ユネスコスクール全国大会は2010年10月に本学の講堂で開催させていただきました。その5か月後の2011年3月11日に、あの東日本大震災が発生いたしました。地域の惨状と教育現場の荒廃に直面して、私どもは全国の大学や関係者の皆様のご支援をいただきながら、宮城教育大学に「教育復興支援センター」を立ち上げ、2019年までの間に約1万人の学生を被災地にボランティア派遣することができました。そうした経験を今後に継承していくため、現在は「防災教育研修機構」を立ち上げて、教員養成と研修を進めております。

東日本大震災から3年後の2015年3月には第3回国連防災世界会議が仙台で開催されました。持続可能な開発目標（SDGs）11には「仙台防災枠組」について言及されております。今日の社会では自然災害と人為的な災害とを分けることができません。東日本大震災では地震・津波に続いて原発放射能災害が発生しています。今日、私たちは新型コロナウイルス感染症への対応に苦しんでおります。また、気候変動による豪雨災害や土砂災害といった災害は、人間の土地開発に関係があるわけで、そこにも人間の開発と自然との共生・調和という課題が顕在化しております。

本日の第13回ユネスコスクール全国大会では、持続可能な未来を切り開くために、このような開発と共生の問題、そして人権や社会的正義に関わる課題を克服するための教育の在り方などについて、児童生徒間、そして教員間で活発な議論がなされることを期待しております。本日のご盛会をお祈り申し上げます。

# 基調提案・パネルディスカッション

テーマ「大震災から明日を拓く教育の在り方を探る～ビフォー311・アフター311 から学ぶ～」

司会：市瀬 智紀（宮城教育大学教授）

今回の基調提案およびパネルディスカッションは、「大震災から明日を拓く教育の在り方を探る～ビフォー311・アフター311 から学ぶ～」をテーマに、宮城県仙台市の宮城教育大学会場から配信。

## I. 基調提案 ～パネルディスカッションの趣旨

### ■市瀬 智紀（宮城教育大学教授）

本日は、震災から10年を迎え、「大震災から明日を拓く教育の在り方を探る～ビフォー311・アフター311 から学ぶ～」というテーマで仙台からお届けする。まず、このテーマを語るに当たり、3月11日に何があったのか、個人的な話からさせていただきたい。



#### 1) 311 に何があったのか

2011年3月11日（金）、私はドイツのユネスコスクールのコーディネーターの方をお迎えして、翌週14日（月）にユネスコスクールである仙台市立中野小学校を訪問する予定だった。

中野小学校は蒲生干潟での野鳥観察で優れた取り組みをしている学校だった。しかし、午後2:46に大震災が起これ、中野小学校は津波に飲まれてしまった。教職員の方々は校舎に取り残され、地域住民と共に一晩を過ごされたが、コンビナート火災などがあり校舎の中は漏電の危険性もあり、通信も遮断され、非常に辛い時間を過ごされたと聞いている。その後、ドイツのコーディネーターの方から「飛行機が飛べなくなり、行けなくなった」というショートメールの連絡が入った。数か月後、ドイツのユネスコスクールからたくさんの応援メッセージ（写真）を頂戴した。

このような大震災に直面して、本日のパネルディスカッションの基調提案という大きな役割をいただいているわけだが、私個人としては「自分自身は、自然災害と被災した方々に直面しても何もできなかった」というのが正直な感想である。唯一できたことは、被災地に行き、ドイツからのメッセージをお届けし、震災で消息がつかめなくなっている本学の学生を探して水や食べ物を届けたに過ぎなかった。

先ほど、「自助・共助・公助」という話があったが、災害に当たっては「共助」に当たるのか、「公助」に当たるのか、その定義はわからないが、国内外からさまざまなご支援をいただいた。

震災直後 ドイツユネスコスクール  
から届いたメッセージ





## 2) UNESCO Paris KIZUNA Project

このスライドはユネスコスクールパリ本部の KIZUNA プロジェクトに関するもので、先ほどの例と同様、世界各国から頂戴した被災地への応援メッセージである。これについては後ほど触れたい。



## 3) みんなひとつプロジェクト

ユネスコバンコクオフィスは、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）と協同して「みんなひとつプロジェクト」を展開され、私も関わらせていただいたが、単に被災地にメッセージを伝えるのみならず、各国で防災教育を同時に実施した。

例えば、フィリピンでは台風による洪水災害などの被災の経験について学び、学校内の防災体制について見直す活動を行った。また、バングラデシュでも、洪水災害の比較や防災の備えについて同様に学校内で議論した。



## 4) 被災した児童生徒に向けた今日にいたる継続的支援

このような支援は今日まで続いている。公益社団法人日本ユネスコ協会連盟は、大震災で被災した遺児・孤児に向けて継続的な支援を行っており、その支援は今日まで続いている。

このように東日本大震災で自助・共助・公助の枠を超えてさまざまなご支援をいただいた、そこから生まれたユネスコスクールと被災地との交流は、現在まで続いているものもある。

## 5) アフター311で地域の防災教育はどう変わったのか

この10年間で、ユネスコスクールの教育を中心として地域の防災教育がどのように変わったのかが注目されるわけだが、例えば、震災の翌年、東日本大震災の経験を踏まえて、文部科学省で「学校防災マニュアル作成の手引き」というものが作成された。宮城県では「防災担当主幹」が設置され、「防災主任」が任命された。また、2014年から2016年にかけては「防災副読本」というものが作成された。2015年3月には「第3回国連防災世界会議」が仙台市で開催された。尚、「防災担当主幹教諭」は現在、「安全担当主幹教諭」に変更されている。

このような取り組みによって、「学校防災マニュアル」といったものを各学校で自校化して点検するといった活動が行われた。重要なポイントは、地域の町内会・自治会と学校が密接に連携して防災教育の実践が展開されたことである。さらに、防災副読本を活用した「防災教育」も展開されている。そして、さまざまな学区のみならず、もう少し大きな圏域や市町村レベルでの連携も進んでいる。また、東日本大震災の教訓も踏まえて、避難所における女性や障害のある方など、社会的弱者への配慮も少しずつだが進んでいるところである。

## 6) 第3回国連防災世界会議「東日本大震災総合フォーラム」

国連防災世界会議は世界に東日本大震災の教訓を伝える非常に重要な機会となった。宮城教育大学では、東日本大震災総合フォーラムの中で「持続可能な開発のための教育を通じた防災・減災の展開」というテーマのフォーラムを開催した。ユネスコ本部（パリ）ESD 課長のアレクサンダー・ライヒト氏にお越しいただき、京都大学大学院教授（当時）のラジブ・ショウ氏にコーディネーターをお願いしてパネルディスカッションを行ったところ、大変注目を集め、1,000 人もの方々にご参加いただいた。



## 7) 持続可能な開発目標（SDGs）11 の提示

2015 年に SDGs11 が提示されたときには、「仙台防災枠組」がその中に示された。この SDGs11 は、単に津波や地震の災害について述べているわけではなく、例えば、私たちが今日苦しんでいるコロナウイルスなどの感染症による生物学的災害や気候変動による災害リスクについても盛り込まれている。

## 8) アフター311 でユネスコスクールの活動はどう変わったのか？

さて、本日は特にアフター311 でユネスコスクールの活動がどう変わったのかについて、3 つの学校の事例をご紹介します。お話ししたい。

### ①福島県立安達高等学校 ESD 課題研究の変遷

ユネスコスクールのひとつである福島県立安達高等学校では、ESD の学習を中心に活動を進めておられ、私も 10 年間ほどお世話になり、ESD 研究発表を聞かせていただいている。安達高等学校は福島県の内陸にあるが、被災者をたくさん受け入れた地域のひとつでもある。そうした地域にあって安達高等学校が考えられたのは、心理的にダメージを受け、避難生活を送り、不安定な状況にある子供たちのことだった。当時は放射能汚染も甚だしく、どのような学習活動をしたらよいのか困惑されているところだった。そこで、「何か特別な活動をすべきではないか」と当時の先生方が考えられ、2012 年 4 月にユネスコスクール加盟を果たされた。そして、自然科学を中心に原発事故、放射線、除染といった研究活動を中心に、ユネスコスクールの取り組みが始まった。

この写真はその自然科学の活動時のもので、2017 年 7 月に民間ユネスコ運動 70 周年記念のユネスコ運動全国大会が仙台で開催された時に発表された。左下の写真が「霧箱」と云われるもので、「何とかして放射能を捕まえたい」「放射能に苦しむ現状を何とか変えたい」といった高校生の取り組みが、こうした自然科学部の活動に現れている。上の写真は放射能の汚染土で、実際に現地に行かれて撮影したものである。



また、福島県に対するさまざまな国際的評判の低下で生徒は苦しんでいたことから、ESD 研究発表会

の最初のテーマは「原発事故・放射能・除染」「風評被害」などが中心だった。また、エネルギーについても関心が高まった。その後、ESD の展開が進み、さまざまな国際連携を中心とした国際交流、地域の人口減少問題、どう地域を盛り立てていくかという観光の問題、さらに持続可能な循環と消費(フードロス)などに生徒の目が向かっていった。

今日では、コロナウイルス感染症や SNS における誹謗中傷、昨今のテーマである LGBTQ の話題が連続して取り上げられている。そして東日本大震災から 10 年を経過して、「どう被災の経験を伝えていったらよいのか」という思いから、実際に東日本大震災および原子力災害の伝承館に行き、それらの被害を見学して、体験を深めるという活動をしている。

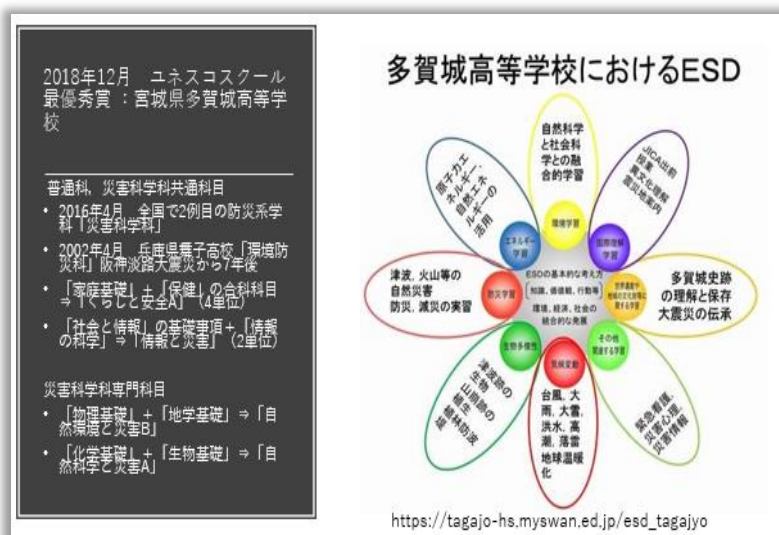
## ②多賀城高等学校における ESD

次に 2018 年 12 月にユネスコスクール最優秀賞を受賞した宮城県の多賀城高等学校の事例を取り上げたい。多賀城高等学校は 2016 年 4 月に全国で 2 例目の防災系学科「災害科学科」を設立した。これは 2002 年 4 月に兵庫県立舞子高等学校が設立した「環境防災科」から 2 例目の防災系学科の設立になる。

この災害科学科の教育では、自然科学あるいは社会科学的な側面から防災について研究するのみならず、「ESD の視点で結び付けていく」ということが行われている。また、普通科と災害科学科の全校共通の教育として、東日本大震災の教訓をいかに伝承していくのか、防災減災の基本的知識・技能の習得、ボランティア活動の充実、外部機関や自治体との連携、防災・災害の学習、他校との連携などの学習を展開されている。

そして多賀城高等学校の特徴的な取り組みとしては、学校の特設科目として「合科科目」といったものを設置されている点が挙げられる。例えば、「家庭基礎」と

「保健」を合わせて「くらしと安全 A」、「社会と情報」の基礎事項と「情報の科学」を合わせて「情報と災害」という科目を作られている。これは普通科との共通科目となっている。また、災害科学科専門科目としては、「物理基礎」と「地学基礎」を合わせて「自然環境と災害 B」、「化学基礎」と「生物基礎」を合わせて「自然科学と災害 A」というような科目を独自に設置されている。ユニークで優れた取り組みとして紹介させていただいた。



## ③気仙沼市立階上中学校の事例

さらに、ユネスコスクール気仙沼市立階上中学校の事例もご紹介したい。階上中学校は 2011 年にユネスコスクール最優秀賞を受賞された学校で、震災前からすでに自助・共助・公助といったことを提唱して防災教育を進められてきた。そして、震災を経験されて今日に至っているわけだが、10 年が経ち、どのような活動を展開されてきたのか。



この写真は、階上中学校がユネスコバンコクオフィスの「UNESCO Associated Schools Network, Collaborative Action Research on the Role of Schools in Achieving SDGs in Asia-Pacific」という国際的なネットワークに参加して共同学習を行い、その成果として発表された写真である。

階上中学校の取り組みでは、例えば、従前から避難所の設営などに生徒が主体的に参加するというのをされていた。ただ震災から10年が経ち、児童生徒の中で震災に対する記憶が薄れてきていることも確かである。そうした中で、地域に出かけていき、被災された方のお話を実際に聞くという活動を行い、それをさらに自分自身で深めていく

ために探求型学習の中で分析していくという活動をされている。その後、地域の方々との共同学習の中から、さまざまな課題をまとめて地域社会に向けて発表し、さらに地域のコミュニティとの対話を繰り返してこられた。そのような活動の中から生徒の自発的な取り組みがたくさん生まれている。

例えば、小学校に行き、自分たちより幼く記憶の少ない子供たちに東日本大震災の教訓を伝える活動や、気仙沼向洋高等学校の震災遺構(写真参照)で防災ボランティア活動を行い、外部から来た方々に東日本大震災の経験を伝える活動をされている。そして今年、今まではグループで行っていた課題研究を個人レベルで進めるということで、探求学習コーディネーターの方に来ていただき個人で深めていく活動をされている。

さらに津波防災・被害のみならず、地球規模での気候変動や多発する災害に関する防災減災教育へと広がった「防災教育+〇〇」あるいは「防災教育×〇〇」といった活動も進められている。



## 9) 鈴木耕平さんから Youth に向けたメッセージ

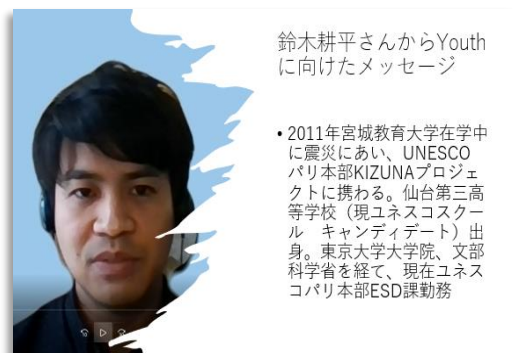
最後になるが、このような ESD によるユネスコスクールの取り組みが10年経ってどのような成果を示したのか。この成果を示すことが私たちに課されている。どのような人が育っているのか。本当に多くの方々がユネスコスクール活動の中で育たれ、社会で活躍されているわけだが、本日はその中の一

人、鈴木耕平さんをご紹介したい。

鈴木さんは 2011 年に宮城教育大学在学中に東日本大震災を経験され、そのときに冒頭申し上げたユネスコパリ本部の「KIZUNA プロジェクト」に携われた。鈴木さんは仙台ユネスコ協会の青年部メンバーで、その後、東京大学大学院に進まれ、文部科学省に入省されて、現在はユネスコパリ本部の ESD 課に勤務されている。彼の出身校の仙台第三高等学校は、現ユネスコスクール・キャンディデートとして活動されている。

それでは、鈴木さんのメッセージをお届けする。

## ■鈴木 耕平氏（ユネスコパリ本部 ESD 課勤務）



皆さん、こんにちは。本大会の開催を心よりお祝い申し上げます。

私は今、文部科学省から派遣され、ESD を推進する部署に所属している。そして、本大会の会場である宮城教育大学の卒業生でもある。こうしたさまざまなご縁があり、今回このようにユースの皆様に向けて話をさせていただく機会を頂戴し、心から嬉しく思っている。まだ若い身ではあるが、今の職業的な立場ではなく、一人の人間として学生時代の経験

談をユースの皆さんに少しだけご紹介したい。

本大会では東日本大震災から 10 年ということ踏まえた議論がなされると伺っているが、大震災の発生当日、私はこの宮城教育大学の研修プログラムの一環でオーストラリアにいた。当時、故郷である宮城県が想像を絶する大災害に見舞われ、異国の地でとてつもない無力感に襲われたことを強く覚えている。「自分には何ができるのか」「どのようなことが今、求められているのか」。帰国してそのようなことを考えていた時に、ユネスコスクールでもある宮城教育大学から NGO の仙台ユネスコ協会での活動をご紹介いただいた。それがユネスコとの初めての出会いであり、そして今の私の核となる部分を形成するきっかけとなった出来事だった。

当時、パリのユネスコ本部では、被災した学校の子供たちに世界中からの応援メッセージを届けようというプロジェクトが立ち上がっていた。震災後、間もない動きだったので、学校に負担をかけないように、そして必要なものは翻訳するなど、さまざまな配慮が求められた。そのため、被災地の実情を踏まえながらプロジェクトを機動的に遂行するために、ボランティアとして、そしてプロジェクトの中心として活動することになった。結果として、このプロジェクトでは世界 50 か国以上から 3 万通を超えるメッセージが仙台ユネスコ協会に届けられ、当時の仲間たちと一緒に 160 余りの被災地の学校にメッセージを届けた。大変な作業だったが、この活動は世界の連帯や平和を強く意識するきっかけにもなった。このプロジェクト以外にも、ユネスコ協会での活動を通じて、学生同士はもちろん、企業や自治体、NGO といったさまざまな立場の方々とご一緒し、多様な知見に触れながら「自分はどのように社会に貢献したいのか」といったことを深く考えるようになっていった。

今日、ユースの皆さんにお伝えしたいのは、「何かに疑問や関心をもったら、ぜひ、まずはそのことに取り組んでみていただきたい」ということである。私の場合は「被災地にどう貢献できるのか」といった疑問をきっかけに教育への関心を広げ、さらに自分の頭で考えて、自分の足で行動する、そういったことを一層心掛けるようになった。まさに東日本大震災は、私自身の生き方に大きく影響した出来事で

あった。

どんな小さいと思われることでも一歩前に進めば、新たな疑問や学びが生まれると思う。それを繰り返して、また学校はもちろん、社会のあらゆる方々と関わることで、皆さんの考えや行動はより洗練されたものになっていくと思う。皆さんが経験する多くのことは、いつか点と点が結ばれて線になるかのように、どこにどのように生きてくるかわからない。私自身、学生時には自分がユネスコ本部で働いている姿までは全く想像できなかったし、当時、ユネスコ本部でメッセージカードを担当されていた方は今、私のすぐ近くで働かれている。やはり縁というものをを感じる。

「皆さんは今、どのようなことに興味がありますか」「どのようなことに課題意識をもっていますか」。ぜひ行動しながら考えてみていただきたい。それは皆さん自身の人生を豊かにするだけでなく、きっと社会をよりよくすることになると信じている。

最後になるが、今回は貴重なお役目を頂戴し感謝申し上げるとともに、本大会のご盛会を心よりご祈念申し上げたい。

【司会】鈴木さんありがとう。

それでは、これよりパネルディスカッションに移りたい。

## Ⅱ. パネルディスカッション

### 1. パネリストの紹介

本日はパネルディスカッションのために3名の先生にお越しいただいているのでご紹介する。ご協力いただきながら進めていきたい。

【パネリスト】

畠山 三弘（宮城県気仙沼市立気仙沼小学校教諭）

榎木 千枝（宮城県気仙沼市立大谷小学校教諭）

三浦 美咲（宮城県気仙沼市立大谷小学校教諭）

### 2. 大震災と防災教育に対する個人的な思いについて

まず、本日のテーマに即して質問させていただきたい。3月11日に、どのような思いで東日本大震災を迎えられたのか。そして、そのご経験からなぜ防災教育を積極的に推進されるようになったのか。個人的な思いからお話しいただきたい。

#### ◆畠山 三弘（宮城県気仙沼市立気仙沼小学校教諭）

私は現在、気仙沼小学校に在籍しているが、以前は神奈川県川崎市で10年間教員をしていた。東日本大震災の後、宮城県に戻り、今年10年目になる。

東日本大震災の時には、川崎市の小学校で6年生の担任をしていた。卒業식을1週間後に控える中で2分以上続く大震災があり、クラスの女の子たちがパニックになり、大きな声を出して静かにさせたこ

とを今でも覚えている。その 2 分間の中で、「校舎が崩れてしまうのではないか、このまま机の下にもぐらせたままでよいのだろうか」と考えた。それまでは、何も考えずに子供たちを外に出すという避難訓練しかしてこなかったが、このとき初めて、果たしてこのままでよいのかと感じた。

川崎市の学校では津波の被害はなかったが、それでも「これからどうするか」という話し合いが 30 分間にわたり行われた。結局、考えた末に集団下校となり、保護者に会えなければ学校に子供を連れてきて避難させることになったが、それでも保護者の方々から学校に対して厳しいご意見などもいただいた。

そうした経験を通して、「防災教育には 100 点の答えはない」と感じた。また、東日本大震災で子供たちの命を守るためには最適な答えをその場その場で導き出すことが必要になるという経験をし、そうしたことを伝えていくことが大事だと考えている。

#### ◆榎木 千枝（宮城県気仙沼市立大谷小学校教諭）

私は南三陸町にある名足小学校で東日本大震災を経験した。名足小学校の校舎は新しく、阪神淡路大震災の揺れでも壊れないと聞いていたので、畠山先生のように校舎が崩れてしまうのではないかという心配はしなかった記憶がある。

大きな揺れの後、すぐに津波警報が鳴ったので、子供たちと一緒に避難訓練通り、2 階の高さにある駐車場に避難した。子供たちは訓練通り落ち着いて避難していた印象があり、日頃の訓練がいかに大事かを改めて感じた。しかしその後、想定された高さよりはるかに高い津波が来てしまい、校長先生はじめ先生方で話し合い、より高いところに子供たちを移動させなければいけないということで、校長先生や先生方の判断でどんどん上の方に逃げていった。

震災後 1 年間の間、仮設先での借り生活の後、ユネスコスクールの気仙沼市立落合小学校で勤務することになり、気仙沼市の「教育研究員」という取り組みに参加し、防災についての研究をすることになった。震災後、気仙沼市の先生方は、「避難訓練はしっかりできていたが、これから先はそれ以外の防災教育についてもっと教えていく必要がある」と感じていた。しかし、「避難訓練以外に何をしたらよいかわからない」という学校や先生もいらした。そこで、研究員で「防災学習シート」という指導案集のようなものを作り、各学校にお配りし「ぜひご活用ください」という形にしていた。

今、この防災学習シートだけでなく、さまざまなところから防災に関する副読本が出されているので、これらを活用しながら充実した防災教育が行われているのではないかと個人的には感じている。

【司会】「防災学習シート」については後ほど触れたい。榎木先生は震災当時、名足小学校におられ、今、隣に座っておられる三浦先生はその時、同小学校の生徒だったと伺っているが。

#### ◆三浦 美咲（宮城県気仙沼市立大谷小学校教諭）

はい、当時私は名足小学校の 6 年生だった。教室にいた時に東日本大震災が発生し、尋常でない揺れに子供ながらに「津波が来るかもしれない、普通ではない」と思っていた。机の下にもぐって机を押さえつけるのがやっとで、向かいの友達が泣いているのを見て大変なことが起きていると感じていた。

榎木先生からお話があったが、訓練通りに校舎裏の 2 階の高さにある駐車場に避難した。揺れは続いていたが、訓練通りに落ち着いて行動すると自分に言い聞かせ、訓練どおりにやれば大丈夫だと思っていた。その後、もっと高い津波が来るということで裏山に避難したが、自分たちの命を守るためには必要なことだと納得して避難していた。



今、感じているのは、大川小学校のように子供たちが犠牲になってしまった事例がある中で、全員の命を助けてくれた先生方にはとても感謝している。そして、母方の祖父が津波に巻き込まれて亡くなったことから、命を守る防災教育に興味を持った。そして、防災教育に携わりたいという思いから、教師を志して宮城教育大学に入学した。

宮城教育大学の「311 ゼミナール」というゼミでの活動を通して、災害に対する知識や日頃の備えの大切さを学んだ。小学校で経験した学校避難について当時の先生方からアンケートを取ったり、当時の校長先生と一緒に避難路を歩いたりしながら検証する活動を通して、「正しい知識と日頃の備えがあったからこそ、しっかり避難できた」ということを学んだ。また、ゼミ生の中に震災に向き合うことに後ろめたさを感じている学生がいたことから、災害から命を守るためには過去の災害に向き合って学ぶことは絶対に必要なことで、震災を伝承していくことの大切さも大学での活動を通して感じた。

【司会】2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生した当時、畠山先生は神奈川県川崎市の学校におられ、校舎に不安を感じたということ、また榎木先生は南三陸町名足小学校の教諭、三浦先生は同小学校で学ぶ 6 年生だったが、正しい導きによって津波からの被害を免れたというお話をいただいた。

ご自身の震災当時の状況と被災経験についてお話しいただいたので、ここで少し休憩をとり、現役高校生のビデオ収録による発表をご覧ください。気仙沼市のユネスコスクールで防災教育に取り組む高校生 3 名が、津波や防災の経験をどのように伝えていったらよいのかを考え、工夫や苦労を重ねられている取り組みの紹介になる。まず、お一人目の気仙沼高等学校 1 年小松さんの発表をお届けする。

#### ★ビデオ収録による高校生の発表① ～小松 美咲（宮城県気仙沼高等学校 1 年）



私は「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」で震災の記憶を伝える「語り部」をさせていただいている。

語り部をするに当たり難しい点がある。それは、来場者は震災の記憶がなかったり、経験されていなかったりするので、震災の怖い経験だけを話すか、あるいは震災で役に立った話をするか、というバランスのとり方がとても難しいということである。怖い記憶だけに偏ると、「震災は怖いものだったんだ」という印象で終わってしまうし、役立つ情報だけ

を話しても震災の恐ろしさを伝えきれず、知識を学ぶということで終わってしまうのではないかと思います。とても難しいと感じた。しかし、語り部をした後に、来場者の方から「話を聞けて良かったです」「自分も住んでいる地域の災害を知って、避難の仕方を考えてみます」という言葉をいただけて嬉しかった。

私は階上中学校出身だが、中学校で学んだことは地域ごとで考え方が異なると感じた。他の地域の中学校と交流すると、自分たちの地域の方が豊富な知識もあれば逆に不足している知識もあったので、そうした豊富や不足を補い合えたら良いのではないかと、これから必要なのではないかと、いうことを学んだ。

高校生に伝えたいことは、すべての分野の自然災害はつながっているということである。例えば、震災の津波だと、「想定をはるかに超える高さの津波が来て、被害が大きくなってしまった」という話があるが、これは台風などによる大雨で「洪水の被害にあう地域が多くなってしまった」という話と重なる



と思った。このように、ひとつの知識や自分の持っている小さな知識からでも、たくさんのことと結び付け、災害時に生き抜く力を身に着けてほしいと高校生の皆さんに伝えたい。

【司会】小松さん、ありがとう。防災教育への取り組みには非常に地域差があるというのは、こちらの地域でも同様かと思った。

### 3. 被災地で行われている防災教育の特徴について

それでは先生方に続けて伺いたい。先生方は非常に先進的な取り組みをされていると思うが、被災地から防災教育について発信するということで、被災地で行われている防災教育の特徴的なことについてお話しいただきたい。

#### ◆畠山先生

私は気仙沼小学校で防災主任をしている。まず、気仙沼市全体の話として、気仙沼市には防災主任の研修会があるので、それについてご説明したい。

#### 1) 気仙沼市立幼稚園・小・中学校防災主任研修会

東日本大震災以降、全国で防災主任などの防災教育推進のために「防災主任制度」が制定され、気仙沼市は全国でもいち早く、この防災主任制度を制度化した。また宮城県では、地域の拠点校に「安全担当主幹教諭」を配置し、地域の小中学校の防災主任の支援などを行っていただいている。気仙沼市の「防災主任研修会」は、同市の幼稚園、小学校、中学校の防災主任と安全担当主幹教諭の先生方で行っているものである。

#### 気仙沼市立幼稚園・小・中学校防災主任研修会

- |      |                                                                                                                                                                      |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 対象   | ・気仙沼市立幼稚園（5校）・小（14校）・中学校（11校）の防災主任<br>・気仙沼市立学校安全担当主幹教諭（6名）<br>※安全担当主幹教諭が会を運営していく                                                                                     |
| ねらい  | ・気仙沼市が防災・減災教育のためにどのような取組を行っているのかを理解し、地域や各校における防災計画や防災教育に生かす。                                                                                                         |
| 研修内容 | ・各校の防災マニュアルの確認・見直し<br>安全担当主幹教諭より、様々な項目について、マニュアルに記載があるか確認。<br>例：新型コロナウイルス対応<br>・講和<br>学校安全の基礎理解等<br>・ワークショップ<br>例：中学校区ごとに集まり、学区で自然災害が発生した場合に起こりうる危険とその対処方法についての話し合い。 |

具体的な研修会の内容としては、1回目に各学校の「防災マニュアル」の確認や見直しなどを行っている。安全担当主幹教諭が、それぞれの学校でずれが生じないように、マニュアルに各項目に関する記載があるかを確認している。最近では、新型コロナウイルス感染症の他、豪雨災害などが多発しているので、それらについての記載や、どのような対応をしているかの確認を行っている。防災マニュアルは一度作成したら終わりではなく、その時々に合わせてアップロードしていくという意味で重要な役割を果たしていると考えている。

また「ワークショップ」ということで中学校区ごとに幼稚園・小学校・中学校が集まり、自然災害が発生した場合に、それぞれの学区でどのような危険があるのか、それに対して学校としてどのように対応していくのか、子供たちにどのような声掛けをしていくのか、などについて話し合いなどを行っている。ワークショップを通して分かった危険の中で、学校や子供たちに伝えた方が良く考えられるものについては、学校に持ち帰り子供たちに伝えている。そういった意味で、非常に有効な研修会だと思っている。

## 2) 気仙沼小学校の防災教育

気仙沼小学校としての防災教育の特徴を簡単にお話すると、さまざまな場面での想定訓練が他校に比べて比較的多いと感じている。休み時間や掃除の時間に行うなど、毎回、校庭に避難するわけではないが、昇降口までの「ミニ避難訓練」などを行っている。また、9月には「防災教室」、毎月11日付近には朝15分の「防災タイム」というものも実施しており、それらが本校の防災教育の特徴だと思っている。

例えば、写真は低学年の防災教室の例で、45分間の中で「避難バッグ」の中身の確認を行っている。本校では子供たち一人ひとりが学校に避難バックを用意している。これは、最低限のものを持って1日でも2日でも学校の中で避難できるように用意しているものである。低学年は保護者にご用意いただくことが多いが、「なぜ水があるのか」「毛布があるのか」を問いかね、子供たちは一つひとつの必要性などを考える。また、「こういうのも必要かもしれない」という子供たちから出てくる意見もあり、自分事として考えている様子も見られた。

### 気仙沼小学校の防災教育

|                          |                |               |           |
|--------------------------|----------------|---------------|-----------|
| ・引き渡し訓練(2回)              | ⇒4月・10月(中学と合同) | ・集団下校訓練(3回)   | ⇒5月・8月・1月 |
| ・不審者対応訓練                 | ⇒5月            | ・地震・津波想定訓練    | ⇒6月       |
| ・休み時間地震想定避難訓練            | ⇒6月・9月         | ・地震津波想定ミニ避難訓練 | ⇒9月・2月    |
| ※業間時間、清掃時間               | その場で終了         | ※業間時間、昼休み     | 校庭で人数確認   |
| ・防災教室                    | ⇒9月            | ・防災ロングタイム     | ⇒3月       |
| ※低学年、中学年、高学年が1時間防災について学ぶ |                | ※朝の時間+1時間目    | 防災の全校集会   |
| ・防災タイム                   | ⇒朝15分の防災学習     |               |           |
| ・火災想定避難訓練                | ⇒11月           |               |           |

#### 【気仙沼小の防災教育の特徴】

様々な場面での地震想定訓練を実施  
児童が自ら避難する訓練を実施  
訓練以外に防災について考える時間を設定



防災教室 低学年  
避難バックの中身の確認



集団下校訓練  
各学期始めに実施

右側は集団下校訓練の写真である。実施されている学校も多いと思うが、本校でも学期に1回行っている。この集団下校訓練時にも各担当職員にお願いして、帰宅途中で地震が起こった場合の避難として頭を守る訓練などを行っている。場所によってはブロック塀が倒れる、海のそばであれば津波が起こる場面を想定してお願いしている。「ここはブロック塀が倒れるかもしれないから、少し場所を移動して避難しよう」または「津波が来るかもしれないから、どこに避難するか」など、どうやって身を守るのかを考えさせる。そういったことを集団下校訓練時に行っている。

## 3) 火災想定避難訓練後の煙体験

本校でも火災想定避難訓練を行っており、この写真は避難訓練後の「煙体験」訓練時のものである。煙体験は低学年だけ行っている。こうした体験を通して、子供たちが感じることは多いと思っている。

ギガスクール構想で一人一台タブレットをもらっていることもあり、訓練後にはそのタブレットでグーグルフォームを使って振り返りを行わせている。避難時に「先生の話をしっかり聞くことができたか」「走らずに素早く移動することができたか」など、子供たち一人ひとりが振り返りを行っている。



火災想定避難訓練後の煙体験

子供たちがアンケートの記入を終えるとすぐ、グーグルフォームではアンケート結果を自動的に円グラフに示してくれるので、先生たちが課題を理解する上で有効である。また、子供たちが自由に記入する欄を作ったところ、これまでは訓練後、各担任が振り返るだけだったが、「火災の時にサイレンが鳴るとドキドキして、本番では動けなくなるかもしれない」「防火扉を見た時にぐらぐらして、すぐに避難が難しいと思った」など、実際に子供たちが感じた一人ひとりの感想を理解することができ、次の訓練時の声掛けや意識する点においても非常に有効だと考えた。



#### 4) 地域を支える意識を防災教育で高める

私は今年度、教職大学院の2年目にあるため、このスライドには、これからの防災教育の中で重要になると思われるところを示している。

さまざまな人たちとの出会いを通して、子供たちの心を揺さぶり、自分たちが地域を支えようとする意識を高めていくことが重要だと考えている。まだ自分のクラスでの実践になるが、このような実践を行っていることを最後にご紹介して終わりにしたい。



【司会】この部分は、体験から共感、共感から感情移入へというユネスコでも云われているトランスフォーメーションの部分なのと思う。また後ほど続けてお話しいたきたい。  
次に、榎木先生に現在行われている防災教育の特徴的な取り組みについてお話しいたきたい。

#### ◆榎木先生

##### 「防災学習シート」

こちらが2014年3月に発行した「防災学習シート」の表紙になる。防災学習シートには71もの指導案集が含まれ、多すぎて活用方法がわからないと思われる先生方もいるかと思い、防災学習「必修シート(気仙沼っ子シート)」「推奨シート」「充実シート」、そして「心のサポートシート」などを作り、これはやってください、これはやるといいですよ、ということがわかりやすくなるよう目次をつけた。また、その目次とは別に全校向け、低学年向け、中学年向け、高学年向け、また中学生向けのシートにも分けて改めて目次を作り、そこを見れば一目でわかるような工夫をした。このような防災学習シートの中味も活用しながら、私が実際にどのような取り組みを行ったかをご紹介します。





この写真は今年実施した取り組みで、気仙沼市立大谷小学校の6年生を対象に「災害時の家族との連絡の取り方を考えよう」という授業を行った時の様子である。震災の記憶が今の6年生くらいではあまりないこともあり、東日本大震災がどんなものだったかにも触れながら授業を進めた。

多くの連絡手段がある中で、普段どんな方法で家族や友達と連絡を取っているかを子供たちに尋ねると、ラインやテレビ電話、SNS などが出てくるが、大震災の時にはそれらがすべて使えなくなったという話をし、災害時の連絡手段を増やし、連絡の選択肢を一つでも多く持っていることが家族との連絡が取りやすくなるということに授業を進めた。

左側の写真は「災害用伝言ダイヤル（171）」を使ってメッセージを録音できることを子供たちに見せている様子で、右側の写真では、もう一人の先生にご協力いただき、残したメッセージを再生し家族に聞かせることができることを示している。「災害用伝言板（web171）」というメッセージを残せる機能もあるので、子供たちに実際にメッセージを残してもらう活動も行った。

子供たちに災害用伝言ダイヤルや災害用伝言板を聞いたことがあるか尋ねたところ、6年生児童20人全員が知らないこともあったので、活動を通して、こうした選択肢もあることを体験させられたことは意義があったと思う。また、どちらも体験利用日が決まっているので、例えば、家族で使ってみるならお正月に試せることなども紹介して授業を締めくくった。

もうひとつ大谷小学校の取り組みを紹介したい。大谷小学校では、幼稚園、小学校、中学校、公民館と合同で避難訓練を行っている。いずれも比較的近くにあつて津波による浸水の心配もある場所のため、「皆で高台を目指しましょう」ということで、同じ高台へ避難する訓練が行なわれている。この写真は幼稚園の子供たちが避難している様子だが、同じ場所で小学生と中学生、公民館の方々も10分以内に避難することを目指して訓練をしている。

今は避難訓練のみ実施しているが、実際は避難後に長い時間を共に過ごさなければならないことも想定されるので、小学生と中学生との交流や、小学生と幼稚園児との交流などが今後必要になり、顔見知りになるなど、日頃から絆づくりをしていくことも必要ではないかと思っている。

【司会】防災教育シートは非常に細かく、各学年のどんな分野でも利用できるものである。安心機能を活用した災害用伝言ダイヤルなどの取り組みや、地域と協働した防災教育など、大変貴重な情報をいただいた。

最後に、三浦先生にどんな防災教育の実践をなさっているのか、お話を聞きたい。



## ◆三浦先生

私からは、教科の中で行われている実践についてお話をしたい。

### 1) 身近な災害への備えを調べる活動

私は4年生の担任をしている。4年生の社会科で「自然災害から暮らしを守る」という単元があり、そこで地震から暮らしを守る取り組みについて学習した。その単元というのは、自助・共助・公助という視点で、人々が災害に備えてどのような取り組みを行っているかを学び、自分たちにできることを考えるという学習である。

まず、子供たちに事前にアンケートをとった。子供たちの周りの災害への備えについて、「おうちでどんなことを備えているか知っていますか」という質問に対して、「わからない」と答えた生徒が多かったことから、自分事として捉えさせる工夫として、一人一台タブレットを持ち帰り、自分の家で行っている災害への備えについての写真を撮り、社会の授業で紹介するという活動を行った。

右側の写真は防災バックの中に入っているもの（水、食料、ラジオなど）を紹介している様子である。災害が起きた際、テレビが使えなくてもラジオが使えるなどの話をした。また、子供たちの身近にある通学路の備えについても勉強した。「避難所」「大谷小学校」と書いてある看板や、「津波浸水区間」という道路沿いの標識なども使いながら、日常生活の中にも備えがあるということを学んだ。



### 2) 防災主幹や地域との協力

防災主幹や地域とも連携して授業を行った。子供たちの学びを深める上で、実際に生の話を聞くということとはとても効果的だった。

例えば右側の写真は、安全主幹と協力して公民館と連絡を取り、公民館の市職員の方に学校に来てもらって話をしていただいている様子である。公民館の方から、「市役所は災害が起きた時に災害対策本部になる」「公民館や地域のコミュニティセンターは避難所になる」などのお話を聞いた後、子供たちからも「身近な公民館がこんな働きをしていることを知らなかった」という言葉が多く上がり、とても良い勉強になったと感じた。

左側の写真は、安全主幹に学校にある市の防災倉庫を紹介してもらっている様子である。いろいろな人が避難してくるという想定で、防災倉庫には事前学習で学習した水や食料、ラジオ以外にも、簡易トイレやおむつなど、多くのものが備えられているということを勉強し、子供たちも「いろんな人が避難してくるんだね」「毛布がこんなにあるんだね」など、多くの発見をした様子であった。

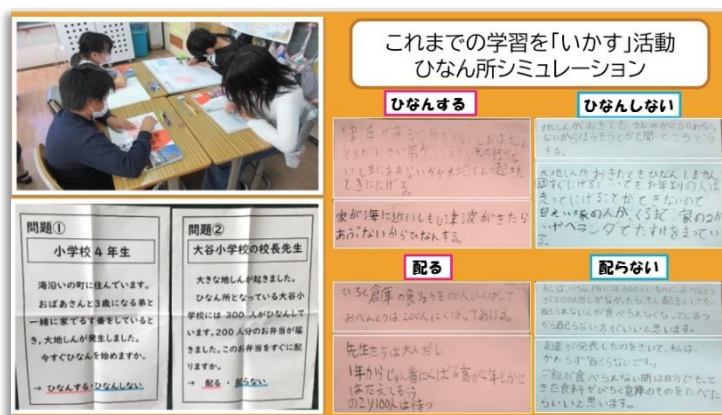


### 3) これまでの学習を「いかす」活動 ひなん所シミュレーション



学んだ知識を学んだままにしておくのではなく、それを「いかす」活動も大切だと感じ、この単元の最後に「ひなん所シミュレーション」というものを実施した。

写真の「問題①」「問題②」をご覧ください。問題①は、小学校4年生という立場で「海沿いの町に住んでいます。おばあさんと3歳になる弟と一緒にいる番をしているとき、大地震が発生しました。すぐにひなんしますか？」という質問に対して、「ひ



なんする・ひなんしない」という二択で答える問題になっている。子供たちからは、「海の近くの津波が来ると危ないから、すぐに避難する」、また、「おばあさんと3歳の弟がいるので早く避難しないと間に合わない」ということから「避難」を選んだ児童や、「まずは状況を確認するために防災無線などの放送などを聞き、すぐには避難しないで状況を見て判断する」と答えた児童もいた。

問題②では「大谷小学校の校長先生」という立場になり、「大きな地しんが起きました。ひなん所となっている大谷小学校には300人がひなんしています。200人分のお弁当が届きました。このお弁当をすぐに配りますか。」という質問に対して、「配る・配らない」の二択で答える問題となっている。「配る」と答えた児童は、「まず低学年から配っていく」と社会的に弱者と云われる人たちに先に配るということに目を向けていたり、学んだことを生かし、「学校の備蓄倉庫の食料を100人に配ればよいのではないか」と考えた児童もいた。「配らない」という児童は、「公平に皆が食べられるように配らないでよく」とか、「市役所が災害対策本部になるので、そこから応援が来るかもしれない」と学びを活かして考えている様子が見られ、学習したことがしっかり子供たちの中に落ちていっていると感じた。

【司会】小学校4年生の社会科の単元で実現できる具体例についてお話しいただいた。公民館と連携しながらの活動や、実際に生徒さんの様子をご紹介いただいた。「ひなん所シミュレーション」についてもあえて矛盾した設定にして考えさせるということで、実際に活用できる事例だと思った。

それでは、ここで気仙沼向洋高等学校1年阿部さんの発表をお届けする。

## ★ビデオ収録による高校生の発表② ～阿部 蓮（宮城県気仙沼向洋高等学校1年）



私は「語り部」と「マイプロジェクトアワード」という活動に参加しているが、今日はマイプロジェクトアワードについて話をしたい。

マイプロジェクトアワードは、気仙沼市とNPO法人で進めている取り組みである。説明会に参加し、最初はやってみたいと思っただけだったが、チームを組んでテーマを決める段階で、防災関連についてやろうと思った。

計画した内容は「自分たちで防災キャンプの内容を考えてみよう」というもので、「キャンプ」という名前だと興味を持ってもらえると思った。また、中学生の時にやった防災訓練を参考に、高校生らしく、興味を持ってもらえる内容にした。コロナの関係もあるので日帰りで

できる内容にして、来月 12 月に発表する予定である。プログラムを考える難しさもあったが、同時に面白さもあった。これを通して地域の方々とのコミュニケーションや交流なども図りながら、防災の知識や教訓を身に付けてほしい。

最後に高校生に伝えたいこととして、防災を学ぶにあたり最初から難しいことを調べるのではなく、身近ところから調べることなどがコツだと思っている。何より積極性を持って、挑戦して学ぶことが大事だと思う。

【司会】阿部さん、ありがとう。

#### 4. ユネスコスクール・ESD の文脈で行うことの意味について

ここまで防災教育の具体例についてお話しいただいた。こうした津波被害や防災教育というところから発展して、私たちはこれをユネスコスクール・ESD という文脈で行っているわけだが、防災教育や津波被害を含んだ形でユネスコスクールや ESD の活動することにどのような意味があるのか。ユネスコスクール・ESD の文脈で行うことの意味について少し議論してみたい。

畠山先生、今の問いに対してお考えがあればお願いしたい。

#### ◆畠山先生

お答えになるかわからないが、私は教職大学院 2 年目で、「子供たちの心を揺さぶり、それによって、これから地域を支えようとする意識を高めていく」ということを研究している。今後、さまざまな自然災害がいつ起こるかわからないという状況の中で、「最も大切な備えは何か」を考えた時に、「地域を支える人づくり」というものが最も大きな支えだと考えている。

地域を支える人づくりのために最も重要なことは、災害時、気仙沼市であれば東日本大震災の時、地域の人を支えるために努力した人々が気仙沼にもいたし、それぞれの地域にもいたと思う。私はそうした方々（人あるいは組織や機能の場合もあるが）を震災の記憶として聞き取り調査などを行った。

震災時に活躍したのは経験がある人だけではなく、これから地域を支えるために自分たちにできることを行っている中学生や高校生などもある。先ほども気仙沼向洋高等学校や階上中学校が、震災を経験した人たちの記憶を次の人たちにつないでいく語り部活動などを行っているという話をしたが、写真は気仙沼向洋高等学校で語り部活動を行っている高校生（左）と、友達の死をきっかけに「自分が防災士になって人々の命を救うんだ」という強い志をもって、防災士の資格を取った高校生（右）である。そのような人々との出会いを通して、子供たちは心を揺さぶられ、自分たちにできることをやっという意識が高まっていくのではないかと考えている。

もちろん小学校の段階で中学校や高校のように実践するのは難しい面もあると思う。小学校では、自分事として「自分たちにできることは何だろう」という心を育てていくことが最も重要だと考えている。

「自分たちが」というような意識を小学校の段階で高めていくためには、さまざまな人とのつながりや出会いが大事なのではないかと。今も研究を進めているところである。



【司会】大変重要な示唆をいただいた。小学校の段階で何ができるのかということで、自身が主体となるという意識を育てていくことについてお話しいただいた。

気仙沼向洋高等学校の話が出たので、余計なことだがコロナウイルス感染症のために気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館来館者数が減り、現在クラウドファンディングを実施中ということなので、ご支援の方もよろしく願いたい。

それでは、榎木先生にお話を伺いたい。

#### ◆榎木先生

以前、気仙沼市教育研究員として一緒に研究をしていた仲間の皆さんやご指導いただいた指導主事の先生方と、「防災教育というのは、ESD・持続可能な社会の創り手を育む教育の切り口として相性が良いのではないか」という話をしたことを記憶している。

ESDの文脈で防災教育を進めるという中で、「Think globally, act locally」という言葉を取り上げたい。まず、「Act locally（身近なところから取り組む）」については、自分の住む地域でどんな災害が起こり得るか、その時に自分や家族の命をどう守るかを具体的に考えることが大事になり、それについては学校や地域で具体的な取り組みが行われていると思う。

一方、「Think globally（世界的な広い視野で考える）」についてだが、最近は日本だけを見ても、毎年どこかで大きな災害が起きている。自分の地域では災害が起きず「ああ良かった」と最初は思うだろうが、そこを超えた先に「自分の地域は災害に見舞われなかったが、違う県やどこか遠くの国で、被災して辛い思いをしている人がいる」ということを忘れないような子供たちを育てていきたいという気持ちがある。そうした気持ちが、ボランティアや募金、あるいはメッセージを送るという具体的な行動になっていくと思う。

大人になった時にそうした視点をもった人になれるよう、そういうところも考えながらESDの文脈の中で防災教育を進める必要もあると思っている。

【司会】他者（それは地域の人でもあるし、日本人あるいは海外の人でもあるが）を思いやる気持ちを育てるということが、災害時の支援のきっかけになり、そうした子供たちを育てることが支援を拡大することになるという大変重要なお話を頂戴した。

それでは三浦先生に願いたい。

#### ◆三浦先生

私は震災当時の経験や大学での活動、先ほどご紹介した学校での実践などから、備えの重要性を改めて感じた。また、重要性を感じると同時に、子供たちのすぐそばに災害への備えはあるものの、子供たちはその備えについて知らないという現状を感じた。そこで、まずは身近に災害への備えがあるということ子供たちに知ってもらうことを大切にしたい。

畠山先生のお話にもあったが、防災タイムや避難訓練など、日頃から災害への備えに触れさせて、「自分も備えをしていく社会の一員である」という自覚を育てることが未来の災害に備えることにつながり、それがESDの考え方や持続可能性につながるのではないかと考えている。

自分の周りの備えから視野を広げていくと、自治体との連携だったり、住民同士の連携だったり、多

くの人がつながり合って災害に対して備えているということに気づくと思う。その人たちとつながりながら生きているということを感じさせたいと日頃から思っている。

【司会】個人の災害への備えというところから発展して、人々とのつながりの中でさまざまな問題を解決していくというのがユネスコスクールの特徴で、そのことが私たちの防災への備えにまた立ち戻っていくための非常に良いきっかけになる、というお話を頂戴した。

それでは、高校生の発表の最後になるが、気仙沼高等学校1年末永さんの発表をお届けする。

#### ★ビデオ収録による高校生の発表③ ～末永 詩真（宮城県気仙沼高等学校1年）



私が今、頑張っていることは、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館で来館者に津波や震災について伝える「語り部活動」である。伝承館にはたくさんの方が来てくれる。中には震災を知らない人たちもいて、震災を知らない人たちに語り部をすることは難しいことだが、私たちの話が少しでも多くの人々の命を助ける手助けになってほしいと思っている。また中学校で学んだ災害の知識なども語り部に取り込んでい

きたい。

私が高校生の皆さんに伝えたいことは、風化を防ぐために、それぞれの経験を伝えていってほしいということである。自分の経験を話すことは難しいことだが、少しでも多くの命を助けるために、ぜひ皆さんに話してほしいと思っている。

【司会】末永さん、ありがとう。

#### 5. ユネスコスクールに向けたメッセージ

終盤になるが、全国のご視聴いただいているユネスコスクールに向けて、最後に一言ずつメッセージを頂戴したい。

##### ◆畠山先生

学校の中で防災教育だけをやっていくのはなかなか難しいと私も感じているところはある。しかし、先生方が子供たちと接する中で、「子供たちがこの先、5年後、10年後に地域を支えていく」という意識を常に持っていれば、おそらく子供たちに対する声掛けも変わっていくのかではないか。そのような意識を持ちながら、ぜひ関わっていただきたいと思うのが、まず1点目である。

2点目としては、最初に川崎のところでお話ししたが、防災に関して「正解」というものはないのではないかと。どのような回答が正しいのか、子供たちが納得できる回答を自分たちで考えられるように、「1つ目の選択肢はこれで、メリットとデメリットには〇〇がある。2つ目の選択肢のメリットとデメリットには〇〇がある。だから自分はこちらを選択する」というような力をつけていくことが大事だと思っている。防災教育以外でもできると思うので、ぜひそうしたことを実践し、地域を支える意識を皆で高めていただければと思っている。



#### ◆榎木先生

子供たちに考える力や防災・命を守るための知識を身につけさせるには、やはり時間とタイミングが大事になると思う。詰め込めば身につくというものでもないし、発達段階に応じて、短い時間でこういう話をした方が良く、長い時間をかけてじっくり考えさせたほうが良いということもあると思う。

そういったことを見極めながら、継続的にタイミングを作りながら、なんとかやっていくことが大切だと思っている。これからも頑張っていきたい。

#### ◆三浦先生

社会の授業をしていて感じたことは、防災教育というのは被災した地域だから何か特別なことができるということではなく、子供たちの身近にどんなことが備えられているのか、身近なところから子供たちの学びにつなげていくことが大事だということである。

知らなかったことを知ることで子供たちの顔がこんなにも輝くのかと感じたので、子供たちが防災について「怖い」と思うより、「備えれば命は助かるものだ」と楽しみながら学んでいけるように頑張っていきたい。

【司会】先生方から今後の抱負も含めて伺えたかと思う。

それでは最後に、見上一幸先生に総括をお願いしたい。

## 6. 総括

### ■見上 一幸（前宮城教育大学学長、尚絅学院大学特任教授）



皆さんこんにちは。気仙沼の先生方や高校生の皆さん、パリから鈴木耕平さん、市瀬先生に感謝申し上げます。

皆さんの発表から防災教育が進んだことを実感した。震災から10年が過ぎ、各地で大きな自然災害が起きている。全国各地で先生方が防災教育に真剣に取り組んでおられることと思うが、まず初めに申し上げたいことがある。

先生方がされている防災教育は、どういう形であっても「必ず生きる」「無力ではない」ということを、ぜひお伝えしたい。震災当時を振り返ると、震災2週間後に教育新聞からお見舞いの電話をいただいた際に、「宮城教育大学附属小学校では防災教育をやっておられたが、その成果はどうか」と聞かれた。その時は震災があまりにも大きく、「震災の前には教育も無力だ」というお返事をした記憶がある。ところが、附属の先生方に後で聞いてみると、「防災教育で行った一つひとつが、子供たちの行動にしっかり現れていた」という嬉しいご連絡をいただいた。

当時、仙台では「近い将来、70%の高い割合で大きな地震が来る」と云われていたが、一般には防災教育というものはそれほど考えられておらず、非常に先進的な事例だったが思い切ってスタートしていた。先生方は頑張ってくださっていたが、やはり今の防災に比べるとそれほど進んだ防災教育とは言えなかった。それでも、そういうものが活きたという経験があるので、ぜひ先生方にお伝えしたい。どんな小さなことでも、防災教育を行ったことは子供たちに生きるということである。そして、すでに先生方から十分ご発表いただいているが、この場を借りて4点だけまとめて申し上げたい。

まず1点目は、学校は「命を守る場」であるということ。これを強く感じた。それまで学校は「学習の場」ということで頭がいっぱいだったが、まず初めに命を守る場であるということだ。

2点目は、教育の原点というのはやはり「寄り添う」ことで、寄り添う教育ということである。復興の過程で、子供たちの心の問題が非常に大きな圧力になっていたことから、その過程で寄り添うことが大事だと感じた。教員を養成されている全国の50近い大学が毎年、学生を派遣してくださり、被災地の教育復興に関わっていただいていた。そうした大学のどの学長もおっしゃるのは、「これは非常にありがたい機会で、学生たちは被災した子供たちと何日か苦労を共にすると、人が変わったようになる。ぜひそういう形で貢献させていただきたい」というお話だった。やはり、学生がまさに「寄り添う教育」というものを体感したからこそ続いているのだと思う。

3点目は、復興の過程で強く感じたことである。被災すると、各種物資が不足するなど困ったことが起こり、新しくネットワークを作るなどということは不可能である。そうした中で、私の経験ではユネスコスクールのネットワークが非常に活きた。これが唯一の大きなネットワークだった。文部科学省や日本ユネスコ国内委員会の事務局のご努力でポータルサイトが作られ、そこに多くの企業が協力してくださった。大学が中継地点となり、被災地からのいろいろな要請をポータルサイトに掲げたところ、大学に多くの支援や物資をお送りいただき、我々が各学校にお届けするという形をすぐにとることができた。被災した場合や災害にも、現在のユネスコスクールのネットワークといったものが大きく役立つということ、ぜひ心の隅に留めておいていただきたい。特に強く感じるのは、外国と直接つながっていることで、お見舞いのメッセージがユネスコスクールのネットワークから次々と届き、被災地としては非常に心強かった。そういうことで、ユネスコスクールのネットワーク、特に海外とも交流を盛んにしていただきたいということである。

最後に4点目、大きな災害が起きたときに末代まで長く言い伝えることが大事なわけだが、いくつかの方法があると思う。浪分神社のように神社を建て、千年前の地震を後世に伝えたような例もある。最近では、女川の中学生の皆さんが10年間かけて津波到達線に21の石碑を立て、千年後までも伝わるようにしたというニュースもあった。同時に、今日も先生方からご発表があったところだが、ユネスコスクールのネットワークで海外の災害を常に自分事として知り、自分たちの経験をお伝えする、あるいは支援先や友達の学校からそういうものを学びとるということもある。世界では災害が次々に起こっている。お互いに自分事として助け合うことによって、何年もの長い間、それこそ千年もこういう形につながり、忘れないようになっていけばよいと思った。

以上感じたまで、思い出も含めて一言申し上げた。

**【司会】** 見上先生、そしてパネリストの先生方、ご参加の皆様に心より感謝申し上げたい。

これにて、基調提案・パネルディスカッション「大震災から明日を拓く教育の在り方を探る～ビフォー311・アフター311から学ぶ」を終了する。

# 企業が行う教育支援や社会貢献に関する情報提供

## 株式会社ファーストリテイリング

### “届けよう、服のチカラ”プロジェクト

「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」は、全国のユニクロ・ジーユーの店舗で行っている「全商品リサイクル活動」の一環として 2013 年にスタートした。全国の小・中・高等学校で、児童生徒が中心となって行う参加型の学習プログラムである。店舗で回収した服を UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の協力を得て、難民の方々にお届けする活動を進める中で、慢性的に子ども服が不足する状況に対して、「服の会社としてできること」を考え、プロジェクトを開始した。

プロジェクトには 4 つステップがある。まず、ステップ①「従業員による出張授業」で活動の動機付けを行う。2020 年度より映像授業とビデオ会議システムを活用したオンライン授業の 2 形式を加えた。授業では、“服のチカラ”や難民問題について学習する。難民が年々増加傾向にあり、約半数が 18 歳未満の子供という事実などを紹介し、難民問題を身近に感じてもらう。また、プロジェクトの活動と SDGs の目標とが密接につながっていること、身近な服を通じて社会貢献活動に参画できることに気づくこともねらいとしている。ステップ②「校内・地域へのよびかけ」および③「告知・回収」は学校主体で行っていただき、児童生徒が自由にアイデアを出し合い計画・実行することで、考え抜く力、チームで働く力、前に踏み出す力などの社会人基礎力を養う。最後のステップ④「寄贈・振り返り」では、現地での寄贈の様子をまとめたフォトレポートをお送りし、各参加校での振り返りに役立てていただいている。

参加後の児童生徒の変化については、SDGs への理解が深まるだけでなく、社会課題を自分事として捉え前向きな意見を持つ児童生徒が増えたことや、難民問題への理解の高まりなどが調査結果から分かっている。

ファーストリテイリングは、これまで 75 の国と地域に、回収した服 4,619 万点(2021 年 8 月時点)をお届けした。2021 年度は過去最高の全国 625 校の参加となり、約 7 万人の児童生徒に参加していただいた。今後も本プロジェクトを通じて未来を担う子供たちと共に、より良い社会づくりに貢献していきたい。



発信者：山口 由希子（株式会社ファーストリテイリング  
サステナビリティ部ビジネス・社会課題解決連動チーム）

## 株式会社三菱 UFJ 銀行

### サステナビリティへの取り組み

MUFG では、「持続可能な環境・社会が MUFG の持続的成長の大前提である」と考え、環境・社会課題の解決と経営戦略を一体と捉えた事業運営をめざしてきた。そして、金融インフラとしての責務を果たしつつ、経営環境の変化に順応し、社会課題への取り組みを強化してきた。そうした中で、本年 4 月には、「私たちはそもそも何のために存在するのか」を問い直し、会社のパーパス（存在意義）を「世界が進むチカラになる。」に再定義した。このパーパスを起点に持続可能な社会の実現に一層貢献していきたい。

また、弊社の戦略 3 本柱のひとつ「企業変革」では、「デジタルトランスフォーメーション」「カルチャー改革」に並ぶテーマとして、「環境・社会課題解決への貢献」を位置付けている。サステナビリティの取り組みによって我々自身が変わっていくという認識を持っており、世の中からの期待と MUFG の事業領域との親和性の両面から、MUFG として優先的に取り組む 10 課題を特定している。この 10 課題を起点に、「事業戦略」「リスク管理」「社会貢献活動」を推進し、環境・社会課題の解決に貢献していく。

社会貢献活動では「寄付プログラム」を新設し、重点領域に「気候変動対応・環境保全」「新型コロナウイルス対応」「次世代支援」「災害支援」の 4 つを掲げ、グループ業務純益の 1%相当を社会貢献活動に拠出している。昨年度は 92 億円を拠出した。

その寄付プログラムを活用してさまざまな取り組みを行う中で、「次世代支援」に関しては、SDGs 達成に向けユネスコスクール対象に活動費用の助成を実施する「ユネスコスクール SDGs アシストプロジェクト」を展開している。2009 年より日本ユネスコ連盟と共同で本プロジェクトを開始し、持続可能な開発のための教育（ESD）を推進するため、1 校 10 万円、また 2 年間の継続プログラムでは 30 万円を上限に助成している。

MUFG では社員一人ひとりが MUFG のパーパス「世界が進むチカラになる。」を心に刻み、持続可能な環境・社会の実現に貢献していく。次世代のチカラになれるよう、引き続き全力を尽くしていきたい。



発信者：石渡 真央（三菱 UFJ 銀行 経営企画部ブランド戦略グループ）



## NPO 法人いのちの教室／協賛カシオ計算機株式会社

### 「いのちの授業」の取り組み

「いのちの授業」は、いじめ、不登校、自殺をなくしたいという思いから、カシオ計算機株式会社が在籍中の 2007 年に社会貢献の一環として立ち上げた。会社の理解をいただきながら 2016 年末まで継続し、退職後の 2016 年 12 月に NPO 法人を立ち上げ、今に至っている。これまで延べ約 700 機関に対して授業や講演を行い、約 8 万人(2021 年 11 月現在)の子ども達と触れ合い、小・中・高等学校、大学、特別支援学校、養護学校など、さまざまな学校を訪問した。

授業の骨格は「事実を伝える」「本気で伝える」「変革を促す」からなる。気づきをもってもらいながら、それで終わりではなく、学んだことや気づいたことを行動に移し、自己肯定感を醸成してもらうことに主体を置いている。小学校 4 年以上の基本的なプログラムは 90 分で、前半 45 分、後半 45 分に分けて進めている。3 年以下は 60 分でお願いしているが、4 年生を含め、学校側との協議で決定している。

低学年の子ども達に「命は何だと思えますか？」と問うと、大人でも気づかないような命への思いを語ってくれる。そこから、命は「知識として教えるものではない」「言葉のみで伝えるものでもない」「頭で理解させようとするものでもない」ということに気づいた。この気づきから、授業に「多角的視点で命に触れる場」「心の中から引き出す場」「子ども達が自ら考え、自ら気づき、発言する場」という 3 つの場を設けている。そのため、前半では生きる意味・価値や命の大切さなどの話を伝えるが、捉え方は個々の心の在り方を尊重し、心の中から大切な思いを引き出す授業としている。一方、後半では幼くして亡くなった子ども達が残した、命と向き合い、命を生き抜いたメッセージに触れていく。

授業後、全国約 4 万人の子ども達から手紙が届き、約 400 人が「命を絶ちたい」と思っていたことが分り、大変ショックを受けた。また、ある高校で約 200 人に授業を行った後、約 40 名の子ども達から「命を絶とうと思っていた」という手紙が届いた。20%の子ども達が命を絶ちたいと思っている学校があるということ、そして、これだけの命を助けるきっかけを創出できた授業であれば、使命感を持って続けていかなければならないと思っている。今後も子ども達の命を助けるきっかけを創出するために、また、様々な面で思い悩んでいる子ども達に心の癒しを提供するため、そして、いじめや不登校をなくすために精一杯努力していきたい。



若尾 久 (NPO 法人いのちの教室)

# ユネスコスクール地方ブロック大会からの報告

## ユネスコスクール関東ブロック大会の報告

関東ブロック：山本 剛大（東京都成蹊小学校教諭）

第2回ユネスコスクール関東ブロック大会は、2021年8月7日(土)、成蹊学園と各会場を結んだオンラインの形で開催し、関東地域を中心としたユネスコスクールネットワークの活性化および活動促進のための交流や情報の収集・共有を図った。

今回の関東ブロック大会では5つの分科会と18件のポスター・動画セッションの報告が行われたが、本日は、第5分科会の成蹊小学校5年生による公開授業「成蹊オーガニックコットンプロジェクト」についてご報告させていただく。

### ■公開授業「成蹊オーガニックコットンプロジェクト」（成蹊小学校5年生）

写真は第5分科会の当日の様子である。分科会参加者の方々には子供たちとの対面授業をリアルタイムで見えていただき、授業後には意見交換会を設け、授業の感想や子供たちの学びの様子について意見を交わし、教材を深めるための情報交換などを行った。

それでは、授業の内容をご紹介します。

第5分科会の様子



#### 1) 自分たちが普段着ている服が、どのように作られているのか知っていますか？

普段、何気なく着ている服が、何から、どのように、何によって作られているのか。大人でもよくわからないことが多いと思う。その根源に迫っていくことで、そこにある社会的な課題にも迫っていくことができるのではないかと考え、この授業を組んでみた。

#### 2) 衣類や家庭用品の繊維として人気があり、全繊維の60%以上を占めるコットン

今回、教材として取り上げているコットンは、衣類や家庭用品の繊維として人気があり、全繊維の60%以上を占めるとも言われている。Tシャツからジーンズ、ガーゼ、包帯、布団、カーテンまで、身近にたくさんのコットンがあることに子供たちは気付いていく。

#### 3) みんなは、どちらのジーンズを買いますか？

コットンが身近な素材と知った子供たちに、次のような質問をした。「1,980円のジーンズと3,980円のジーンズ、あなたはどちらのジーンズを買いますか？」。

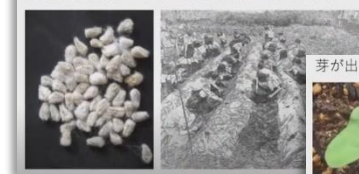
色や形、履き心地、丈夫さは2本のジーンズともほとんど変わらない。違うのは価格のみ。多くの子が「1,980円のジーンズの方が安いから良いのではないか」ということで安い方を選んでいった。「もう一度、最後にこの質問をするからね」ということで、答えは先送りとした。

#### 4) コットンを栽培し、Tシャツを作る！これまでの活動を振り返ってみよう

ここで質問とは離れ、今、栽培しているコットンの様子と、これまでの活動を振り返ることとした。

- ・5月下旬、畑に行きコットンの種(写真)を植えた。
- ・6月になると、芽が出て、双葉が出て、本葉が出るなど、成長する様子を振り返った。
- ・7月になると、どんどんコットンの背は伸びて行き、中旬には、つぼみができ始めた。
- ・8月となり、成長したコットンは花を咲かせた。

5月下旬より、コットン栽培を行ってきました



芽が出て、双葉が出て、成長してきました



7月上旬のコットンはいくらに成長しています



8月の段階でコットンには花が咲いています。では、コットンの花はどれでしょう？



夏休みということもあり、子供たちは花の様子を見ていない。そこで、「コットンの花は次の3つのうち、どれでしょうか？」という質問をした。答えは、Cが正解のコットン(写真)で、Aはハイビスカス、Bはオクラである。

コットンは、このような花を咲かせる。花が散った後、固い緑色の実(写真)をつけ、それが乾燥してはじけるとコットンが出てくる。この3種の植物はすべてアオイ科の仲間で、どことなく花の色や形が似ている。子供たちはネバネバのオクラと、ふわふわのコットンが、同じアオイ科の仲間ということにとっても驚いていた。

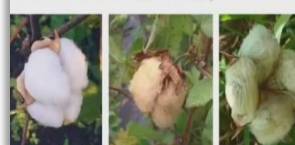
9～11月ごろになると、実がはじけて、中からコットンが出てくる。写真をよく見ると、白色のコットン、茶色の茶綿、緑色の緑綿があることがわかる。子供たちは、いろいろなコットンがあることを知った。

「コットン」と言ってもたくさんの種類があるので、日本をはじめ、いろいろな国々で育てられているオーガニックコットンに実際に触れてみることにした。写真は実際にコットンに子供たちが触れている様子である。コットンに触れて比較してみると、ふわふわしているものやゴワゴワしているもの、繊維が長いものや短いものなど、いろいろな発見があった。

Cの花が、コットン



9～11月ごろ、実がはじけて、中からコットンが出てきます。



実際に授業でコットンに触れている様子



#### 5) 世界のいろいろな土地でコットンは栽培されています

身近な素材であるコットンが世界のどのような地域で栽培されているのか、世界地図で見ていった。

日本では栽培されていないという扱いになっており、実際に自分たちが栽培しているだけに、子供たちはとても驚いていた。日本のコットン栽培は商業ベースに乗っていないということで、栽培されていないと判断されている。

#### 6) 世界で一番コットンを生産している国：インド

世界の栽培の様子を見ていく。写真は世界で一番コットンを生産している国、インドでの様子である。男性がマスクや防護服もつけずに農薬をまいている。インドでは、コットン栽培における農薬や殺虫剤による健康被害が社会問題になっており、コットン栽培に関わる方々の平均寿命は30代後半という話もあるほどである。子供たちはこの様子を見て、とても驚いていた。

世界で一番コットンを生産している国：インド



AsiaNews HPより



7) 世界のコットン農場では子供たちも働いています

写真はウズベキスタンのコットン農場の様子である。子供たちは学校にも行けず、1日中コットン栽培に関わっている。子供たちはこの様子を見て、非常に心を痛めた。



8) 児童労働や薬品の危険性に対策をして栽培:アメリカ

薬品による健康被害や児童労働などの問題に対処するために、アメリカのコットン農園では、高さ 4 メートル以上もある大きな機械を使って一気にコットンを収穫している(写真)。また、飛行機で一度に多くの農薬や殺虫剤をまくという方法をとっている(写真)。

児童労働や薬品の危険性に対策をして栽培：アメリカ



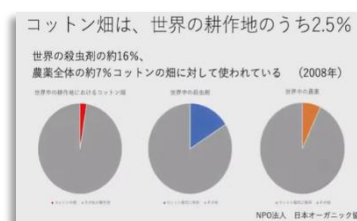
薬品も大量にまく：アメリカ



日本オーガニックコットン協会HPより

9) コットン畑は、世界の耕作地のうち 2.5%

コットン栽培では、大量に収穫するために多くの殺虫剤や農薬がまかれる傾向がある。コットン畑は世界の耕作地のうち約 2.5%だが、世界全体で使われる殺虫剤の約 16%、農薬全体の約 7%がコットン畑で使われていると言われている(グラフ参照)。コットンは多くの薬を使う栽培物なのである。



### 10) 収穫前のコットン畑の様子

写真は収穫前のコットン畑の様子である。収穫時、まわりの葉っぱが絡みつき、きれいなコットンが収穫できないことがある。それを防ぐために、大きな農園では枯れ葉剤をまき、葉っぱを落とした後にコットンを収穫するという方法がとられている。非常に危険なことである。



11) 大量に作られたコットン：中国(新疆ウイグル地区)

世界各地ではたくさんの薬品や、ときに幼い労働力を使って多くのコットンが収穫されている。写真は中国で収穫されたコットンの様子である。



## 12) 大量にジーンズを作る工場：バングラデシュ

大量に収穫されたコットンは縫製工場に送られ、私たちが着る服へと加工されていく。写真はバングラデシュの縫製工場の様子である。安い賃金で多くの女性工員が世界中のジーパンを作っている。2013年にバングラデシュで起きた「ラナ・プラザ」（縫製工場が入った複合ビル）崩壊の件についても触れた。

児童労働や大量の薬品使用、縫製工場の現状など、コットン栽培に関わる社



縫製（ほうせい）工場：バングラディッシュ



ラナ・ブラザ  
死者1,134人、  
負傷者2,500人以上



会的課題について、子供たちと考えた。

### 13) コットン自体は食品ではないが、その種は口にしているかも・・・

子供たちから、「食べるわけではないから、大量の薬を使って栽培しても良いのではないか」という意見も出たが、そうではない。コットン自体は食べることはないが、その種子から出る油を口にしているのかもしれない。

### 14) みんなは、どちらのジーンズを買いますか？

コットンに関わるいろいろなことを学んだ後、最初の問い「1,980 円のジーンズ、3,980 円のジーンズ、あなたはどちらのジーンズを買いますか？」に戻ると、多くの子が 3,980 円のジーンズを選択した。「誰かの命を削って作られたジーンズは履きたくないな」「価格の背景に何があるかを知ったらこっちを選ぶかな」というような意見が聞かれた。

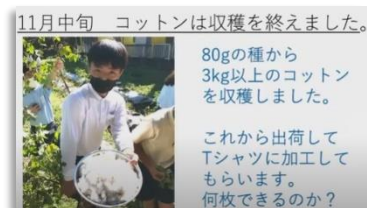
### 15) NPO の Fashion Revolution の動画

最後に NPO の Fashion Revolution という団体の動画を見ることによって、ファッション業界も「このままではまずい。変わらなければ」と考え、対策に取り組んでいることも確認した。

### 16) 11 月中旬にコットンは収穫を終えました

ここからは 8 月 7 日の授業後の様子である。

11 月中旬にコットンは収穫を終えた。80 グラムの種から約 3 キログラム以上のコットンを収穫できた。収穫したコットンは出荷し、T シャツに加工してもらう予定である。



### 17) この授業は、実際にコットンを栽培してみたことと、知識が繋がってこそその学びがあります

8 月 7 日の授業は、実際にコットンを栽培している子供たちだからこそ、知識とのつながりがあり、深い学びになったのではないかと考えている。

子供たちが今後、服を買う際に迷った時など、学んだことが一つの選択肢になるとよいと授業者としては期待している。

以上、第 2 回ユネスコスクール関東ブロック大会の報告として、第 5 分科会「成蹊オーガニックコットンプロジェクト」の学びの内容をご紹介させていただいた。ご清聴に感謝申し上げます。

# 文部科学省からの施策説明

## ESD とユネスコスクールについて

田口 康（文部科学省国際統括官/日本ユネスコ国内委員会事務総長）



これまでのユネスコの動きや、ESD がどう進められてきたのかを簡単に御説明したい。

### 1. ユネスコ（国連教育・科学・文化機関）とは

ユネスコは国際平和と人類の福祉を目的として設立された国連の専門機関で、今年(2021年)で設立75周年になる。また今年は日本が加盟してから70年という節目の年でもあった。

このユネスコの総会は2年に1回、本部のあるパリで開催されており、第41回総会が先日（11月9～24日）開催され、私も参加してきたところである。

**ユネスコ（国連教育・科学・文化機関）とは**

- ユネスコ(国際連合教育科学文化機関、United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization: U.N.E.S.C.O.)は、諸国民の教育、科学、文化の協力と交流を通じて、**国際平和と人類の福祉の促進を目的とした国際連合の専門機関。**
- 創 設: 1946年11月4日（日本加盟: 1951年7月2日）
- 加盟国・地域数: 193カ国(2020年2月現在)

(ユネスコ憲章前文より)  
戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑忌と不信をおこした共通の原因であり、この疑忌と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。ここに終りを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代りに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。  
文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つすべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって築かなければならない神聖な義務である。  
政府の政治的及び経済的取極のみに基づく平和は、世界の諸人民の、一致した、しかも永続する誠実な支持を確保できる平和ではない。よって平和は、失われなければならない。人類の知的及び精神的進歩の上に築かなければならない。

**70th**  
Anniversary of Japan's accession to UNESCO

### 2. 「持続可能な開発のための教育」

“Education for Sustainable Development”

一方、ESD「持続可能な開発のための教育」は、2002年のヨハネスブルク・

**「持続可能な開発のための教育」**  
“Education for Sustainable Development”

- ◆ 持続可能な社会の創り手を目指すため、現代社会における地球規模の諸課題を自らに関わる問題として主体的に捉え、その解決に向け自分で考え、行動する力を身に付けるとともに、**新たな価値観や行動等の変容をもたらすための教育**。国際理解、環境、文化多様性、人権、平等の個別分野を持続可能な開発の観点から統合し、分野横断的に行われる。
- ◆ ESDは、2002年、「持続可能な開発に関する世界首脳会議」(ヨハネスブルク・サミット)において我が国が提唱した。国連決議を経て、ユネスコが主導機関となり国際的に推進されている。

ESDは、**持続可能な社会の創り手の育成**を通じ、**SDGsのすべての実現**に寄与する

【参考】ESD for 2030の決議(一部抜粋)  
2. 持続可能な開発のための教育は—(中略)—質の高い教育に関する持続可能な開発目標に不可欠な要素であり、その他の全ての持続可能な開発目標の達成への鍵であることを再確認する。  
国連総会決議(2019年12月)

サミットで日本が提唱した概念で、国連決議を経て、ユネスコが主導機関となり国際的に推進されている。特に日本とドイツがけん引役となっている。

ESD とは何か、について今さら申し上げるまでもないが、2015 年に国連が SDGs／持続可能な開発のための 17 の目標を打ち出した後、SDGs の全ての目標の実現に寄与するための教育ということで、国連総会の「ESD for 2030」の決議でも位置付けられている。SDGs 全ての目標と一緒にして、SDGs 全ての目標を達成するための教育ということで推進しているところである。

### 3. 持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議（結果報告）

#### ESD for 2030

は 2020 年に始まったが、コロナ禍と被り、キックオフ会合が 1 年間開催できずにいた。ようやく今年 5 月にドイツが主催して完全オンラインで開催された。オンラインで開催すると物理的な距離は縮まるが、世界中から集まるため、2 回に分けて同じセッションを行うという工夫をした。

日本からは当時の萩生田文部科学大臣も出席し、各国の首脳と議論をして「ESD に関するベルリン宣言」が採択された。

### 4. ユネスコ/日本 ESD 賞（2021 年表彰式）

我が国は ESD の提唱国ということもあり、ユネスコと共催で「ユネスコ/日本 ESD 賞」を提供している。表彰式は毎回、ユネスコ総会に合わせて行っており、2021 年表彰式も総会の開催期間中に、総会が開催されるメイン会場(写真)を使わせてもらい表彰を行っ





た。

今年の受賞団体は、ガーナ、パレスチナ、ペルーというそれぞれ非常にユニークな取組をしている団体だった。

## 5. 皆様の応募をお待ちしています！（ユネスコ/日本 ESD 賞）

ユネスコ/日本 ESD 賞は 2015 年から世界的視野で実施しているが、残念ながら日本からの応募が少なく、受賞もまだである。そろそろ日本の学校や団体が受賞してもよい時期だと思っているので、是非本日御参加の皆様に御応募いただきたい。2 年に 1 度なので、今回は 2023 年冬に公募する予定である。

**皆さんの応募を待っています！（ユネスコ／日本ESD賞）**

**1. 概要**

- 世界中のESD実践者にとってより良い取組に挑戦する動機付けと、優れた取組を世界中に広めることを目的として、我が国の財政支援により、ユネスコが、ESD活動に取り組む機関又は団体が実施する優れたプロジェクトを表彰するもの
- 「ESD for 2030」枠組みの優先行動5分野

1.政策の推進  
2.学習環境の改善  
3.教育者の能力開発  
4.ユースのエンパワメントと動員  
5.地域レベルでの活動の促進

のうち、1つ以上の分野でESD活動に取り組んでいる機関又は団体が実施する、ESDに関する優れた事業を表彰。

- 受賞機関／団体には、1件当たり5万米ドルの奨励金を授与。最大3件を表彰。

**2. 選考基準**

- ESDが持続可能な開発を支える実容をもたらす教育として行われており、個人及び社会の変化につながっていること。
- 持続可能な開発に必要な3つの側面（社会、経済、環境）を一体的に取り組んでいること。
- イノベーションを促すアプローチを採用していること。

**3. 選考手続き**

- ユネスコ加盟国又はユネスコ公認NGOの推薦（各団体最大3件）に基づき、世界5地域から選ばれた国際審査員（5名）による審査会で選考を実施。
- 選考結果を踏まえ、ユネスコ事務局長が受賞機関／団体を決定。

**学校単位で応募可能！**

**次回国内公募は2023年冬を予定**

ユネスコ／日本ESD賞  
2021年公募  
ESD for 2030



## 6. 第2期 ESD 国内実施計画 ～SDGs 達成のための教育の推進～

日本は ESD を提唱したこともあり、文部科学省だけでなく共に主導している環境省、そして国土交通省、経済産業省などの関係省庁が一緒になって関係省庁の連絡会議というものをつくり、しっかりとした国内実施計画を作成して進めている。

そのため、学校だけではなく社会全体で ESD を進めていこうという日本の体制になっている。



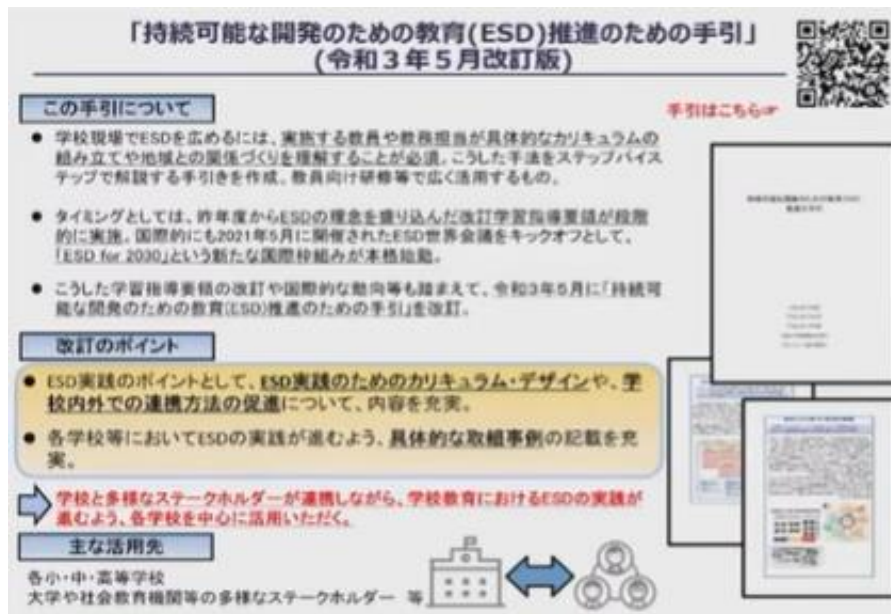
## 7. 新学習指導要領や第3期教育振興基本計画における記載

文部科学省としては、新学習指導要領や教育振興基本計画の中に ESD を位置付けているが、それだけではない。



## 8. 「持続可能な開発のための教育（ESD）推進のための手引」（令和3年5月改定版）

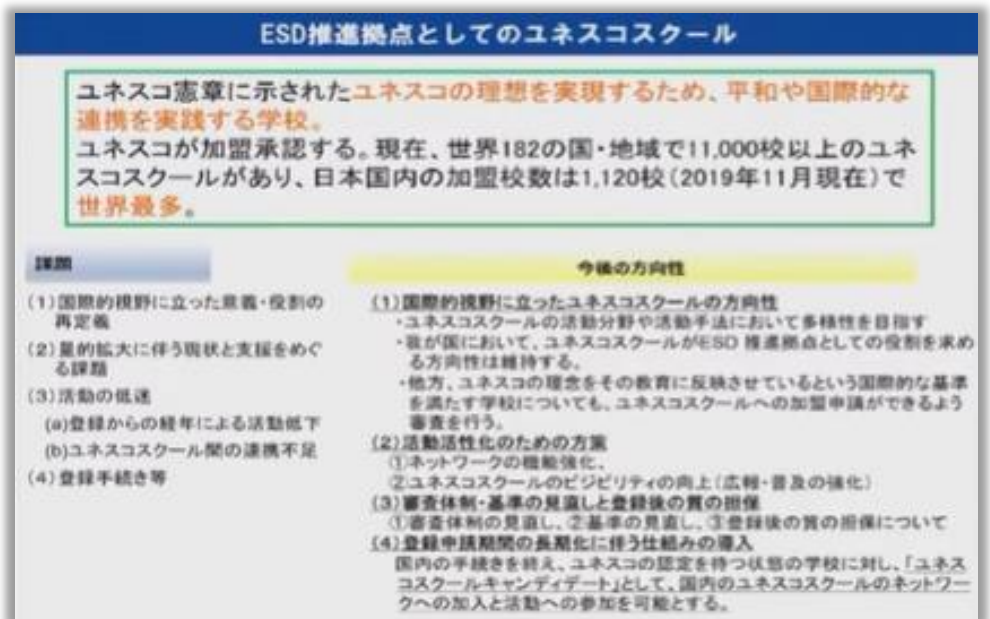
現場の学校の先生方が ESD の取組を進めやすいように「持続可能な開発のための教育（ESD）推進のための手引」を作っており、今春、その改訂版を出した。今回の改訂版は今までの手引の中でも特に完成度が高く、現場の先生がすぐに自分たちで ESD に取り組めるような、現場目線の丁寧な手引になっていると思うので、是非御活用いただきたい。



## 9. ESD 推進拠点としてのユネスコスクール

文部科学省はユネスコスクールをESDのリーディングスクールとして位置付け、推進している。もちろんユネスコスクールはユネスコに登録するわけで、現在1,120校が登録されているが、ユネスコのマンパワーもあり、日本の次の登録を進めてもらえない状況になっている。

そうした中で、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）にも工夫していただいて、ユネスコの手が回らず登録されなくても、皆が一緒にユネスコスクールとして活動できるような仕組みを考えているのでよろしくお願いしたい。



## 10. ユネスコスクール事務局による支援

ユネスコスクールに関する様々な支援については、ACCUに是非お気軽に御相談いただきたい。もちろん文部科学省に御相談いただいても構わない。

## ユネスコスクール事務局による支援

委託先：公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

○ユネスコスクール公式ウェブサイトを通じた情報発信  
(<http://www.unesco-school.mext.go.jp/>)

- ✓ ユネスコ及び日本ユネスコ国内委員会からの情報提供
- ✓ ユネスコスクールに関するイベント情報の発信（国際デーカレンダーの提供含む）
- ✓ ユネスコスクール年次報告書の収集及びアンケート調査の実施、調査結果の公表
- ✓ **ユネスコスクールの活動事例、教材の提供**
- ✓ 加盟校及び関連団体に関する情報提供等

○研修会等の開催、講師派遣、学校間交流マッチング支援 等




## 11. ユネスコ未来共創プラットフォーム

文部科学省では、ユネスコスクールだけでなく、日本全体のユネスコの活動（全国に280近くのユネスコ協会がある他、各地でユネスコ関連の様々な

### ユネスコ未来共創プラットフォーム

○世界や地域の課題解決に資するユネスコ活動の活性化に向けて、SDGsの実現に向けた取組等を進める多様なステークホルダーの知見を得て、国内活動と国際協力の成果の往還に資するよう、国内の多様なユネスコ活動ネットワーク拠点の戦略的整備と先進的なユネスコ活動の海外展開を一体的に推進する体制を構築・運営する。

○地域の個性とユネスコ活動のメリットを生かした地方創成や多文化共生社会の構築、若者や民間企業を含む多様なステークホルダーとの連携を深める組織的なプラットフォームの活動を通じて、ユネスコ活動の活性化を通じた「新たな日常」における持続可能な社会の構築を推進するとともに、多様な変化に対応できる人材の育成を図る。

＜プラットフォームのイメージ＞



ユネスコ未来共創プラットフォーム事務局  
ユネスコスクール拠点  
ユネスコ世界ジオパーク拠点  
ユネスコエコパーク拠点

期待される効果

- (i) 急速な社会変化に対応した恒常的な情報発信、
- (ii) 民間団体との連携強化、
- (iii) 国内のユネスコ活動と国際協力の成果の往還を通じて、我が国のユネスコ活動が我が国やユネスコの優先課題の解決を通じて持続可能な社会の構築に貢献

ユネスコ未来共創プラットフォームポータルサイト  
<https://unesco-fcds.mext.go.jp/>

・ユネスコスクールはじめ、他分野にわたるユネスコ活動の情報発信



活動が展開されている）について、なるべく横のつながりをつくっていこうということで、「ユネスコ未来共創プラットフォーム」という事業を立ち上げた。また、同事業のポータルサイトも立ち上げたばかりで、これから使い勝手をより良くしたいと考えている。

ユネスコの活動はネットワークが非常に重要だと思うので、このポータルサイトを御活用いただき、今までの自分たちの活動だけでなく、是非広げていくチャレンジもしていただきたい。

## 12. 令和3年度ユネスコ未来共創プラットフォーム事業「全国セミナー」

今年は日本のユネスコ加盟70周年にも当たるので、来月12月4日(土)にユネスコ未来共創プラットフォーム事業の「全国セミナー」をオンラインで開催し、ユネスコ協会とも歩調を合わ



せ、70 周年の最後を盛り上げていきたい。

**令和3年度ユネスコ未来共創プラットフォーム事業  
「全国セミナー」**

**趣旨**

- 令和3年度「ユネスコ未来共創プラットフォーム」事業の一環として、オンラインで開催。
- 日本のユネスコ加盟70周年を機に、ユネスコ活動を通して、社会課題解決や新たな価値創造の活動について、どのようなことができるのかを共に考え合い、実現に向けた動きにつなげる機会とする。

**開催概要**

- 日 時：令和3年12月4日（土）  
10:00～16:40（予定）
- 場 所：Zoom によるオンライン開催
- テーマ：日本ユネスコ加盟70周年記念～  
ユネスコ活動が「自分ごと・自分たちごと」になる明日（あした）

**プログラム**

|                                              |                 |
|----------------------------------------------|-----------------|
| 10:00～12:00                                  | 全大会             |
| 12:00～13:00                                  | 昼休み（午後からの分科会準備） |
| 13:00～14:00                                  | 分科会前半           |
| 【テーマ】<br>相互理解と交流：<br>「知り合う、触れ合う、交り合う」        |                 |
| 14:00～15:30                                  | 分科会後半           |
| 【テーマ】<br>実際の事例を使って社会課題解決を<br>「自分・たちごと」にしてみる。 |                 |
| 15:40～16:40                                  | 全大会             |

**つながる、語らう、解決する。**  
未来を動かす仲間になりませんか？

ユネスコ未来共創プラットフォーム  
令和3年度 文部科学省ユネスコ未来共創プラットフォーム  
全国セミナー開催します

**12月4日**  
10:00～16:40（予定）

申し込み・問い合わせ  
03-3581-2140

### 13. 海洋教育に関する国際シンポジウム

ユネスコには政府間海洋学委員会（IOC）というものもあり、その IOC を中心に、来月 12 月 5 日(日)、東京大学の海洋教育センター主催で「海洋教育に関する国際シンポジウム」を開催する。これもオンライン開催だが、皆様に参加できるようなものになっているので、こちらにも是非御参加いただきたい。

**海洋教育に関する国際シンポジウム**

海をめぐることは、気候変動や海洋生物多様性など様々な課題がありますが、海に囲われた私たちの住む地球が持続可能で魅力的であり続けるためには、すべての人が海を通じて地球について考え、行動することが大切です。

このためには、海洋リテラシーや海洋教育の果たす役割が非常に大きいといえます。そしてこれはまさに、持続可能な開発のための教育（ESD）や持続可能な開発目標（SDGs）の実現に向けた学びにつながります。

**日 時：令和3年12月5日（日）  
15:00～19:00（日本時間）**

**場 所：オンライン開催**

**テーマ：持続可能な地球に向けた海洋教育の役割**

**主催者：東京大学大学院教育学研究科附属  
海洋教育センター**

**後 援：文部科学省、日本ユネスコ国内委員会**

申込期限：2021年12月3日（金）  
[https://us02web.zoom.us/join/register?ZWN\\_b98JXU0&TZW\\_-GeMyxzt2g](https://us02web.zoom.us/join/register?ZWN_b98JXU0&TZW_-GeMyxzt2g)

イベント詳細：  
<https://www.cole.p.u-tokyo.ac.jp/news/2479>

**持続可能な地球に向けた海洋教育の役割**

International Symposium on Ocean Education  
**The Role of Ocean Education for Sustainable Earth**  
Dec 12.5 15:00-19:00 JST  
オンライン開催 / Online

私からの御説明は以上となる。御清聴に感謝申し上げたい。



# 特別座談会

テーマ：「わが国におけるユネスコの功績、SDGs 達成に向けての役割」

司会進行：杉村 美紀（日本ユネスコ国内委員会教育小委員会委員長、  
上智大学総合人間科学部教育学科教授）

日本のユネスコ加盟 70 周年を記念して、わが国でユネスコ活動が果たしてきた役割とその功績を共有するとともに、2030 年の社会と教育を想定した ESD とユネスコスクールの今後をご展望いただく。

## 【座談会パネリスト】

安西 祐一郎（前日本ユネスコ国内委員会会長、慶應義塾大学名誉教授）

末吉 里花（日本ユネスコ国内委員会広報大使、一般社団法人エシカル協会代表理事）

安田 昌則（前福岡県大牟田市教育委員会教育長）



## 1. 座談会の趣旨説明

本座談会の大きな趣旨は、日本がユネスコに加盟してからの 70 年を振り返る中で、ユネスコの功績、ならびにユネスコスクールがこれまで蓄積してきた様々な役割を振り返り、今後どのような発展に向けて歩んでいけばよいのかを、パネリストの方々のお話を伺いながら考えていこうとするものである。

初めにお三方からそれぞれのお立場で、これまでユネスコスクールを見てこられた上での御経験・御見識を 10 分程度でお話しいただき、その後それぞれの御発言についての意見交換を行いたい。そして、最後に課題や今後に向けた提案についてまとめるセッション、という流れで進めさせていただきたい。

それでは早速、安西先生からお願いしたい。

## 2. 講話

■安西 祐一郎（前日本ユネスコ国内委員会会長、慶應義塾大学名誉教授）

ユネスコ加盟 70 年ということなので、日本が戦後、ユネスコに加盟した当時のことを振り返りながら現代の状況と絡み合わせてお話しした後、ユネスコスクールについて申し上げたい。

日本のユネスコ加盟は1951年7月のことだが、ユネスコ自体が創立されたのは1946年の11月である。私はそのユネスコが創立された1946年の生まれで、ユネスコと人生を共にしている感がある。日本では1947年に仙台で世界初の「ユネスコ協力会」が創立され、敗戦後の復興の中で「これからは平和が大切だ。平和に向けて皆で一緒にやっていこう」という熱気があった。日本の中のユネスコの活動というのは、そういう人たちによって始められ、支えられてきたというのが歴史の源にある。その後、日本のユネスコ加盟2か月後にサンフランシスコ講和条約が締結され、さらに5年後にやっと日本が国連に加盟する。是非この機会にユネスコスクール関係の先生方にも、そういった歴史のひとこま、当時の「平和への希求」ということを共有させていただきたい。

その後、もちろん教育、科学、文化等々に渡り、ユネスコあるいは日本のユネスコ活動、ユネスコスクールなどの活動は盛んになっていった。そのことは大変素晴らしいことだが、現代の世界を見ると逆に平和が希求されている。平和を維持していくためにどうしたらよいのか、民主主義が問われている。あるいは西欧近代のいわゆる資本主義というか、その曲がり角だとも言われている。気候変動や人権の問題、環境問題等々いろいろなことがあるが、我々はこれから、特に日本は平和維持のために、また皆で一緒にやっていくことはできるのか。そういう時代に来ている。そうした意味では、ユネスコの活動が戦後まもなく熱気に溢れて始まった当時のことをもう一度思い出し、共有していかなければならないのではないか。最初からこういう話で申し訳ないが、そう思っている。

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」というのが有名なユネスコ憲章だが、それをもう一度思い起こしたい。SDGsの目標は17あるが、実は「平和」は16番目で、「貧困」「飢餓」「健康」「教育」…のあと16番目に出てくる。もちろん平和を維持していくには教育や環境の問題もあり、そうした活動を皆で地道に続けていかなければならないのはそのとおりだが、申し上げなければいけないことは、今、世界が本当に揺れている時代になり、もう一度平和への努力を考えていかなければならないのではないか、ということである。

もう一点はユネスコスクールのことで、私も長く日本ユネスコ国内委員会に関わってきて、ユネスコスクールの先生方の御尽力は本当に素晴らしいと思っている。日本ユネスコ国内委員会会長として最後に行かせていただいたのは、大牟田で開催された素晴らしい全国大会の会合で、大牟田市、教育委員会、教育長も一緒になって地域を盛り上げ、「皆で子供たちも含めてやっていくんだ」という活動の熱気は未だに鮮明に覚えている。大牟田だけでなく、毎年各地をお訪ねしていたので、やはりユネスコスクールの活動は本当に大事だと思う。大事だというのは、子供たちに平和な時代を暮らしていただきたいということで、そのためには子供たちに元気に生きていてもらいたい。これからの時代を元気な子供たちに日本の津々浦々、または世界で活躍してほしい。そのためのリベラルアーツというか、そのための素地としてユネスコスクールはあるのではないかな。

SDGsの活動が大事だというのはそのとおりで、その前からやっているESDも大事なわけだが、その一番の根本には、戦後75年以上が経ち、その間ずっと平和できた日本というのは稀有な存在だったという思いがある。この平和な時代を大事にして、これまでの我々の経験を大切に、これから子供たちがそうした平和な時代の中で生きていけるように、ユネスコスクールにお願いというと申し訳ないが、是非頭の片隅に置いていただきたい。

小中学校の新しい学習指導要領も走り始めている。その前文にも「持続可能な社会の創り手」とあり、「担い手」ではなく「創り手」と書かれている。私が関わっていた当時も、文部科学省の初等中等教育局等々に伺ってESDという言葉を入れてほしいというキャンペーンをかなり行ってきたことから、今

「持続可能な社会の創り手」という言葉が「前文」だけでなく「総則」にも入ったというのは非常に大きなことである。こうしたことは形としてのベースになるので、それも支えにしていきたい。

日本のユネスコスクール数は世界の 1 割を占め 1,100 以上あるわけだが、これからは質が問われる。中味をどう持続的につくっていくのかということが問われていると思うし、日本のユネスコスクール活動がそれをリードしていただければ嬉しい。期待も込めて大きなことも申し上げた。

【司会者】安西先生から力強いお言葉をいただいた。只今のお話の中では、平和への希求、特にユネスコ憲章の前文を取り上げられて、もう一度原点に立ち返るとともに、これまでユネスコスクールが積み上げてきた実績を大切に、次世代の持続可能な社会の創り手・平和の創り手としての子供たちの未来に力強く皆で前進しよう、そんなメッセージをいただくことができた。

### ■末吉 里花（日本ユネスコ国内委員会広報大使、一般社団法人エシカル協会代表理事）

エシカル協会で代表を務め、2018 年から日本ユネスコ国内委員会の広報大使を仰せつかっている。ユネスコまたはユネスコスクールの活動との関わりがまだ浅い中で、このような場に登壇させていただき恐縮だが、広報大使としてユネスコスクールを訪問した経験と、日頃エシカル協会の中で活動している内容とを少しつなげて話をさせていただきたい。

広報大使になってから訪問した学校は 3 校で、大田区立大森第六中学校、杉並区立西田小学校、横浜市長立永田台小学校を訪問させていただいた。いずれの学校也非常に印象的な学びをしておられ、中でも大森第六中学校での授業の様子が非常に印象に残っている。訪問時、ほとんどの教科で気候変動や持続可能な暮らしをテーマに授業が行われており、数学では「世界の森林の減少速度を学ぶ」「地球温暖化を関数で考える」といったテーマを軸に「比例と反比例」を学べるような授業を展開されていた。社会では「EU 離脱派と存続派」に分かれ、それぞれの立場で討論が行われ、討論の中で EU の環境政策に関する双方の意見の交わし合いなどが行われていた。英語の授業では、ドイツの 3R の取り組みと日本の環境の取り組みを通して自分に何ができるのかを考えながら、英語でコミュニケーションをとるということが行われていた。さらに技術の授業では LED 照明の製作、理科ではエネルギーの変換効率が学べる実験などが行われていた。非常に感銘を受けた。おそらくこうした ESD の学びが教室を飛び越えて家庭に入り込んだり、地域にまで及んでいったりするのだろう。子供たちが地域社会の中で発信しながら活動していくことで、地域全体が変わっていくのではないかと、あたたかな循環が生まれるのではないかと、という希望を感じた。

エシカル協会という団体で何をやっているのかというと、「エシカル」という物差しをもって、この地球上で人間としてどのように持続可能に暮らしていくことができるのか、ということを全国の皆様に日々普及啓発している。初めて聞く方もいらっしゃると思うのでご説明すると、「ethical」というのは英語で、直訳すると「倫理的な」という意味になり、今、私たちが使っている「エシカル」という意味をさらに分解して、人や社会、地球環境、人間以外の生き物、あるいは地域や社会に配慮した考え方や行動のことを「エシカル」と言っている。どんな人もエシカルな物差しを心にもって暮らしていけるように活動しているわけだが、安西先生もおっしゃっていたように、ユネスコ憲章の中には「心の中に平和のとりでをもつ」という言葉がある。もしかしたら、これに近い考えなのかもしれないと思っている。

日頃は企業や自治体に向けてエシカルな考えなどを伝えているが、最近では学校教育の中で伝える機

会が増えている。先生方が「こうした考えを子供たちにも伝えたい」と言って下さり、ユネスコスクールの学校からお声がけいただくことが多いと感じている。やはり教育が大事だと活動の中で感じている。

エシカルのお話をもう少し続けると、日頃、私たちが手に取って、食べたり、着たり、使ったりしているモノの背後には必ず生産者がいて、誰かが作ってくれている。私たち生活者はそういったものを手にしたときに、その背後に劣悪な環境があるとか、長時間働いている生産者がいるとか、学校に行けずに強制的に働かされている子供たちがいるとか、そういった背景を知ることはできない。例えば、暮らしの中で「そうしたことがないような製品を選んでいこう」ということも非常に重要なエシカルなアクションの一つだと思っている。これを今、私たちは「エシカル消費」とお伝えしているが、エシカル消費は今春から中学校の教科書に初めて掲載された。教科横断的に掲載されているので、ここからがようやくスタートだと思っている。来年度から使われる高校生の教科書にも掲載されることが決まっている。

この普及活動において、「エいきょうを シっかりと カんがえル」で「エシカル」と日頃から説明している。私たちの営みはすべて世界とつながっていて、その中で成立し、見えないところまで互いに影響を与え合っているということを、想像力を持ちながら考え、そして行動に移していくということが非常に重要である。これはまさに ESD の中で教えられてきていることかと思う。「Think globally, act locally」とも言うが、世界の問題を考え、その問題を解決していくために身近なところでどう実践していくのか、そういうことがまさにエシカルな考えと通じる。暮らしの中で実践していくことで、私たちは社会の「変化の創り手」になることができる。従って学校での学びが教室だけでなく、飛び越えて暮らしの中でも生活と学びが実践に移っていくような学びが大事ではないか。

今、気候変動が深刻な地球規模の問題として取り上げられている。平和な暮らしを希求していくことは重要なことだと思うが、健康な地球がなくては平和な暮らしも求められないため、世界的な問題である気候変動に対して、一人ひとりが、子供たちだけでなく大人たちも真剣に捉えて行動に移していくべき時期になっていると思っている。

先日、国立環境研究所の科学者、江守正多氏にお話を伺った。先ごろ国連気候変動枠組条約第 26 回締約国会合（COP26）が開催されたが、それ以前に各国が宣言していた目標が達成されたとしても、3 度近くまで温度が上がってしまうようなペースで、2 度や 1.5 度では温暖化を止める削減ペースにはなっていない、ということをお話しされていた。また、それによって極端現象が各地で起きているが、もしかしたら 1.5 度以内に確実に収めるのは無理かもしれないという状況まで来ている、ということで、これは「地球の危機ではなく人類の危機である」とおっしゃっていた。

この話をお聞ききして感じたのは、世界では温暖化が深刻に受け止められ、一般の若い人や子供たちも真剣に向き合って行動に移しているが、日本で活動していると、海外との切実さの違いを肌で感じるということである。世界では多くの若者が声を上げている。日本の若者たちも頑張っていて、グラスゴーにも数名の学生や活動家が行っており、参加した高校生からは、「COP26 に参加したことで、世界では気候変動に対する意識が日本とはまるで違うということを知った」、また COP26 ではブラジルの先住民の方々など最も気候変動の影響を受けている人たちの声が多く上がっていたようで、「気候問題を考えていくときに、いかにそうした人たち（専門用語で「MAPA(most affected people and areas)」）の声を中心に物事が進められているかが大事だということを学んだ」という声を聞いている。また、「気候変動の問題を突き詰めて考えていくと、人権、格差、貧困、ジェンダーといった様々な社会的問題とつながっていることもよく分かった。だからこそ、まずはどんな人も気候変動の問題を学んで実行に移していこう」という話もしてくれた。



しかし、日本では頑張っている若い人たちに向けて冷笑的なコメントやネガティブなリアクションが多く見られて悲しい。日本の子供たちや若い人たちに、声を大にして「そういった声は気にしないでください」と言いたい。子供たちが自信をもって行動していけるような「変化の創り手」たちを育てていくような教育というのが今、ユネスコスクールにも ESD の教育の中にも求められているのだろうと感じている。

【司会者】末吉さんからは広報大使としてユネスコスクールを訪問された感想や御自身のエシカル協会の活動をお聞かせいただいた。特に興味深かったのは、倫理的な物差しを皆が心に持って活動をつなげていくということ。ユースが世界とつながっていたり、学校が地域とつながっていたり、いろいろな形で一人ひとりの行動を支えてくださっているエシカル協会の活動をご紹介いただいた。

それでは次に、大牟田市の前教育長の安田先生から、ホールスクール・ホールシティによる大牟田市の取組をご紹介いただきたい。

## ■安田 昌則（前福岡県大牟田市教育委員会教育長）

### 「ホールスクール・ホールシティによる大牟田市におけるユネスコスクール・ESD／SDGs の 10 年の取り組み」

本市は約 10 年前、東日本大震災の少し前にユネスコスクール及び ESD と出会った。その際、気仙沼市の学校にも大変お世話になった。

本日は、本市がこれまでの 10 年間、ホールスクール・ホールシティによるユネスコスクール・ESD に取り組んできたことをご紹介し、学校や教育委員会におけるユネスコスクールの意義についてお話ししたい。全国のユネスコスクールの取組と共通することが多くあると思っている。

#### 1)大牟田市の現状：ユネスコスクール・ESD との出会い

本市は福岡県の最も南に位置し、かつては三池炭鉱があり、石炭のまちとして栄えていた。人口は最大で 20 万人だったが、炭鉱が平成 9 年に閉山し、現在は 11 万人に半減している。閉山後、炭鉱関連施設の 3 つが世界文化遺産、「明治日本の産業革命遺産」となっている。

炭鉱閉山後、本市には人口減少や少子高齢化などの課題があり、持続可能なまちづくりに努めていく必要があった。当時の教育長の「石炭の火は消えても、教育の火は赤々と燃えている」との言葉を胸に、教育でまちを元気にしていこうと決意していた。そのような中で 10 年前、文部科学省からユネスコスクールの話があった。

#### 2) ユネスコスクール・ESD のまちへ

早速、教育委員会と校長会や教頭会でユネスコスクール・ESD について学習し、加盟申請について話し合っていた。その結果、本市の目指すまちづくりとユネスコスクールの理念が一致することで、全ての学校で加盟申請することが決まった。そこで教育委員会として全面的に支援することにした。

全校が申請してから約 2 年後の 2012 年には、全ての学校が一斉にユネスコスクールに加盟承認された。当時、市の全公立学校が一斉に加盟承認されることは珍しいと聞き、「ユネスコスクール・ESD の

まち おおむた」を掲げスタートした。当時から今日まで、東京大学の及川幸彦先生はじめ諸先生方に御指導いただいている。

### 3) ホールスクール・ホールシティによる持続可能なユネスコスクール・ESD の推進体制の構築

ユネスコスクール・ESD が持続していくためにも、各学校の教育課程に明確に ESD を位置付けるよう年間計画などを作成し、特色ある活動に取り組むようにした。また、校務分掌にユネスコスクール担当者を位置付け、校内の推進体制を明確にした。ユネスコスクール担当者会では校長会代表は会長、教頭会代表は副会長となり、担当者会の中から部長等の役員を決め運営し、教育委員会が支援する、という各学校でユネスコスクールとして持続的に活動できるような体制をとった。また、教職員については、ユネスコスクール・ESD について多様な研修の機会を設けている。

### 4) 大牟田市教育委員会：ESD の諸施策

教育委員会の諸施策、学校への支援として、このように支援センターの設置、全国実践交流会、子供サミット、ユネスコスクールの日の制定、多様な啓発・普及などさまざまな取り組みができた。

### 5) 市長部局、諸団体、企業との連携による取り組み

市役所では市長を本部長とする「大牟田市 ESD 推進本部」を設置し、さらに教育委員会を中心とした大牟田市 ESD コンソーシアムの結成や、市民による「大牟田市 ESD 推進協議会」がつくられるなど、学校、家庭、地域、市役所、諸団体等と連携を図りながら、市を挙げて ESD を推進してきた。

### 6) SDGs との出会い～「大牟田版 SDGs」の作成と実践

E ESD を推進する中、SDGs が示された。そこで、これまでの ESD の実践をもとに「大牟田版 SDGs」を作成し、普遍的課題を踏まえた本市の課題解決に向け、具体的な活動を展開している。このように「ESD for SDGs」の考えのもと、地方創生の取組を地道に進めている。

2020 年には国連大学から RCE（持続可能な開発のための教育に関する地域の拠点）に認定され、ネットワークを更に世界へ拡大し、SDGs 達成に向けた ESD を進めている。

### 7) 地域の課題解決に向けた ESD/SDGs の実践例

本市の地域の課題解決に向けた実践をいくつか紹介したい。

- ① 吉野小学校「吉野小さくらプロジェクト」：学校と地域が連携し、桜を通したまちづくりの例
- ② 大正小学校「フラワータウンプロジェクト」：コロナ禍にあっても、花を通した花と笑顔のまちづくりを学校と地域、関係団体との協働で行っている。
- ③ 中友小学校「子ども民生委員活動」：子供たちが地域の民生委員さんや高齢者の方々と連携して、共生のまちづくりに向け活動をしている。
- ④ 玉川小学校「米づくりと伝統芸能の継承」、手鎌小学校



「干拓地での農業」：この実践は大牟田の干拓地の歴史を踏まえた農業、食育の実践で、学校と地域が共同して作った農園では有機野菜を育て販売している。また地元のお米に関する伝統芸能の伝承にも努めている。

- ⑤ 環境学習を通したまちづくり：この実践は本市の公害の歴史を踏まえ、多くの団体と連携した環境学習を通したまちづくりの実践例である。



## 8) 国際的な枠組みへの取組

### ～ユネスコ IOC における「海洋科学の 10 年」に向けた取組の推進～

本市の地域課題を踏まえた活動と共に、国際的枠組みへの取組として、例えば、ユネスコ IOC における「国連海洋科学の 10 年」に向けた取組などにもチャレンジしている。

具体的には、東京大学と連携を図りながら有明海から世界の海へと、海を通した ESD・SDGs（海洋教育）に取り組んでいる。来月 12 月 5 日には「海洋教育に関する国際シンポジウム」が東京大学で開催され、本市のメンバーも参加する。



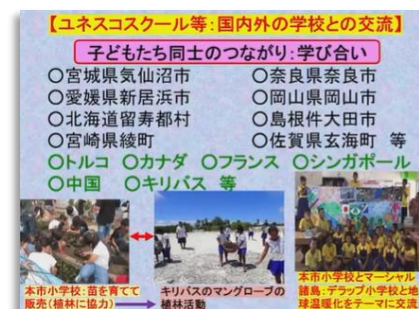
また、国連海洋科学の 10 年の取組の中で示されている海洋リテラシーの育成は大切である。そこで、本市では子供の発達段階に応じた海洋リテラシー育成計画書を検討し、海洋教育副読本を作成した。この副読本を活用しながら、海洋リテラシー育成に向けた活動を進めているところである。

## 9) ユネスコスクール等：国内外の学校との交流

ユネスコスクールは交流が大切である。交流することで学びが広がり深まる。

このスライドは本市の学校と国内外の学校との交流をまとめたもので、特に本市の昨年の豪雨災害時には気仙沼市をはじめ、全国のユネスコスクールからお見舞いと励ましをいただき、心より感謝している。

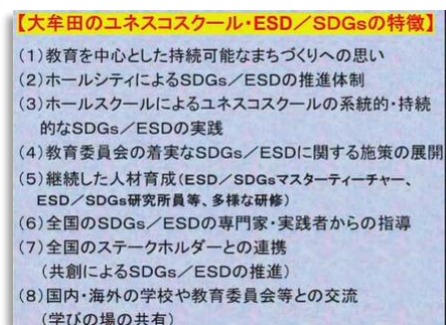
海外については、キリバスと交流しマングローブ植林活動に協力したり、マーシャル諸島の学校と地球温暖化防止について交流したりしている。



## 10) 大牟田のユネスコスクール・ESD/SDGs の特徴

市を挙げての、また学校全体でのユネスコスクール・ESD/SDGs の取り組みについて話してきた。まとめとして、それらの特徴を大きく 8 点挙げる。

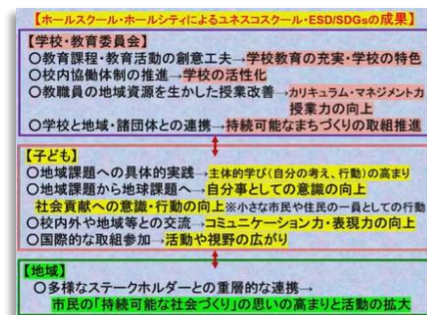
(1)教育を中心とした持続可能なまちづくり、への思いのもと、(2)ホールシティによる推進体制、(3)ホールスクールによる系統的・持続的な実践、(4)教育委員会の着実な施策の展開、(5)継続した人材育成、(6)全国の SDGs/ESD の専門家・実践者からの指導、(7)全国のステークホルダーとの連携、(8)国内・海外の学校や教育委員会等との交流による学びの場の共有、である。



## 11) ホールスクール・ホールシティによるユネスコスクール・ESD/SDGsの成果

このような実践で、スライドに記載したような成果が上げられる。また、これらは本市だけではなく、全国のユネスコスクールの成果に共通すると思っている。

学校では教育活動の充実が図られ、活性化している。また、持続可能なまちづくりに向け、自分なりに考え、行動する子供たちが育っている。さらに、国際的な取り組みへの参加により、活動や視野が広がっている。市民においては、地域や多様な団体などが重層的に連携し、「持続可能なまちづくり」の思いの高まりや活動が拡大している。



## 12) 人材育成による ESD の持続的発展

何よりも嬉しかったことは、ESD に取り組み始めた 10 年前、当時中学 3 年生だった生徒が ESD を次世代へ継承していきたいと教師を目指し、一昨年度、本市の小学校の教師として着任したことである。本当に嬉しかった。

本市がユネスコスクール・ESD に出会い、教育が充実し、市の活性化につながったことを、文部科学省はじめ関係者の皆様に感謝申し上げたい。今後もユネスコスクールおよびユネスコの理想の実現に向けた実践を重ね、ユネスコスクールとして持続可能な社会の創り手を育んでいきたい。

【司会者】大牟田市の活動が活発に行われていることはご存じの方も多いと思うが、今日、改めて振り返っていただいて、SDGs などが言われる前から、まちと一体となった取組が行なわれてきたことを感慨深く伺った。特にお話の最後にあったように、その中で育った学生さんが教員として戻ってこられているということは、大きな希望につながっていると感じた。

今年 3 月、日本の加盟 70 周年を記念して、日本ユネスコ国内委員会会長からメッセージが出されている。そこでも、冒頭に安西先生からお話があったユネスコ憲章の前文、すなわち「人の心に平和のとりでを」を高らかに謳いあげた平和憲章にふれられている。「持続可能な社会を構築していく」というミッションを改めて確認し、一人ひとりが安心安全に暮らすことができる人間の安全保障（これも日本政府が提唱してきた大きなキーワードの一つであるが）、それを実現する教育を展開していくことの重要性を、ユネスコ活動の役割のひとつとして謳っている。

お三方から頂戴したお話では、そうした理念とそれをネットワークでどう支えるか、さらに実際の現場でどのように展開されているか、について語っていただくことができた。

## 3. 意見交換

それぞれのご発言を聞かれ、付け加える御意見があればお伺いしたい。

安西先生は、先ほどの御発言の中で、大牟田のユネスコスクール全国大会に参加されて大変感銘を受けたとおっしゃっていたが、安田先生のお話を聞かれて、その後のことを含めてご所感をお願いしたい。



## ◆安西先生

ユネスコスクールの活動をいろいろ拝見しているが、安田先生の大牟田市の取組というのは本当に模範的なものだ。また、中学3年生だった生徒が大牟田市の学校の先生になられたという話も大変感動的で、そういう事例が出てきてくれると本当に嬉しい。

末吉さんがお話しされた具体的なユネスコスクールのことについて、特に「気候変動」の問題には私も関わっているが、もちろん大変大事だし、日本はもっと深く、そして日本の若者はもっと世界の若者と一緒に活動してほしいと心から思う。また、「EU 離脱」といった問題についても、先ほど「平和」ということを強調したが、やはり社会の状況が大きく変わりつつあり、そういうこともまたユネスコスクールの活動に入ってくるべきではないかと感じる。ただ外野席で言うのは勝手に、やるのは大変だということとはよくわかっている。

もう一つは、先ほど安田先生が指摘された「ヨコ」のネットワークという点。ユネスコスクール同士のネットワークはとても大事である。学校によっては、「非常に熱意をもってやっている先生もいるが、周りは見ている」というケースも散見される。やはり、熱心な先生同士が一緒になって盛り立てていくことはいろいろな広がりにつながると思う。そのためにも全国大会は非常に大事なイベントだと考えている。

さらに「タテ」の関係について。小学校同士だけでなく、中学校と小学校の連携なども十分あり得る。気候変動の問題ひとつとっても、小学校では身の回りの地域社会での様々な環境問題になるが、中学や高校になると資源の問題など、様々なことが複雑に絡んでくる。例えば再生可能エネルギーについても、電気自動車にはリチウム電池が必要だが、日本にはリチウム資源がほとんどないわけで、それをどうするのか。廃棄された電気製品の中に入っているリチウムを回収して使うとか、そうした話もある。末吉さんがいろいろな連携があってエシカルな話で繋がるとおっしゃっていたが、世の中の非常に複雑なつながりを自分でも経験しながら知っていくためには、小学校同士や中学校同士だけでなく、年齢が違う子供たちの連携や先生の連携も必要だろう。大牟田市は全部でやっておられるので凄いと思っている。他の学校でもいろいろな事例があると思う。そういう意味での質を高めるように、是非御尽力いただきたい。

先ほど「平和」と言ったが、70年経ち、ある意味平和ボケというか、平和は空気のように「ただ」という感覚があるように思う。けれども気候変動でも何にしても解決には努力が必要で、皆が元気に関わっていく必要がある。「これからユネスコスクールの時代が来る」と言うのが煽るようで申し訳ないが、そういう時代になったと感じる。是非頑張ってください。私も長く関わってきたので、皆さんと一緒に頑張っていければと思う。

**【司会者】** 安西先生、冒頭のご発言に続き、さらに「煽って」いただき感謝申し上げたい(笑)。連携の話が出たので、よろしければ先生方の御発言を受けて末吉さんから御所感をいただきたい。

## ◆末吉氏

安西先生から非常に大事なお話をお聞きした。私どもの活動の励みにもなるお言葉だと感じた。

私からは安田先生に御質問させていただきたい。大牟田の取組は本当に素晴らしく、先ほど大牟田版SDGsの冊子を拝見したが、ここまでやられるのは本当に御苦労があったと思う。安西先生もおっしゃっていたが、「つながり」という部分でも大牟田市は非常に優れているということで、つながりを見出し

実践していく上で何が鍵を握っているのか。大牟田市の御経験から秘訣というものがあれば、お教えいただきたい。

#### ◆安田先生

10 年前に初めてユネスコスクール・ESD に出会ったが、全くわからなかったので「先進地域に行つて学ぼう」というところから始まった。それが気仙沼市だった。東日本大震災前に教育委員会や学校を訪問し勉強させていただいた。もちろん大震災の時にはこちらも御支援し、震災後も震災復興の様子を学びに行くことができた。やはり ESD の凄さというか、実際に目の当たりにしたということが強烈な印象だった。

そういったことから始まったが、全国のような ESD・ユネスコスクールの実践校やステークホルダーとのつながりというか、いろいろな面での広がりが出てきて、大牟田市の教育委員会や各校の先生が全国に行ったり、また全国から大牟田にお越しいただき研修会を開いて交流したり、そうしたことでの広がりによって私たちはたくさんの学びを得て、それを参考に大牟田なりにアレンジしてやってきた 10 年間だった。

【司会者】大牟田市の取組は素晴らしい広がりだと感じた。午前中のセッションで、宮城教育大学主催の震災 10 周年を記念したディスカッションを伺わせていただいたが、そちらでも先生方が地域と結びついた震災教育に焦点を当てた実践を紹介されており、皆が一体になって取り組んでいる姿がとても印象的だった。また、宮城教育大学を卒業後、文部科学省に入省し、パリ本部で ESD のお仕事をされている鈴木耕平氏から素晴らしいメッセージをいただくなど、ESD を通じて人が育ってきているということを、今大会では強く感じている。その背後には先生方や地域の方々の御努力があるのだと思う。

一連の御発言を受けて何か御意見があればお願いしたい。

#### ◆安田先生

末吉さんにお聞きしたいのは、ユネスコスクールを訪問し学習の様子を御覧になられて、ある意味では外の目から見たユネスコスクールの良さというか、こういうところが凄い、あるいは子供たちが頑張っているなど、お気づきの点があればお話しいただきたい。

#### ◆末吉氏

そこまで経験が豊富でない中でお答えすると、私が見てきた学校の子供たちというのは生き生きとしていて、先生とのコミュニケーションというのも「先生と」というより「仲間」として対話を重ねているという印象を受けた。

もう一つは、皆さん手を動かして何かを作り出すということを積極的になさっているという印象を受けた。今の世界では何でもお金を出せば手に入る、出来上がったものがあってそれを使っている、という世の中だと思うが、私たちは実は「自分たちでいろいろなものを作り出すことができる」というクリエイティブな精神も培われているのかと思った。

尊敬する環境活動家で思想家のインド人、サティシュ・クマール氏が、「誰もが特別なアーティストなんだ」とおっしゃっているが、私にはユネスコスクールの子供たちが皆、アーティストに見えた。自分の手で作り出すことができるというのは、人間としての生き方や暮らし方を取り戻していくようなプロ

セスとも感じた。

#### ◆安田先生

ユネスコスクール・ESD では、やはり子供たちがいろいろな課題を自分事として考えられる。そうした主体的な学び。何かをつくり上げていこうとする。そして、やはり大事なことは、「自分も小さな市民のひとり、地域の小さなひとりなんだ。だから自分なりに考えて、できる行動をしていく」というような子供たちの姿が生まれてきていることだと思う。末吉さんに、ユネスコスクールの良さについて評価していただき感謝したい。

【司会者】ユネスコスクールが中心になって盛り上げていただいている ESD の実践について、お三方に様々な角度から振り返っていただいた。

一方で、実践を進めている全国の先生方や地域の方々も含めて、「もっとこうしたらよい」とか、「こういう課題もあり、こういうところを伸ばしたらよい」ということもあるかと思う。日本ユネスコ国内委員会の教育小委員会の議論にいつも参加させていただいているが、日本ユネスコ国内委員会でも ESD・持続可能な社会の創り手を育てるための実践をどのように考えていけばよいかということで、委員の先生方からいろいろな御意見がでている。そこで中心的に言われていることのひとつが、「日本にはこんなにユネスコスクールがあり、今般も全ての学校が ESD に関わっていこうという動きがある中で、良い実践を皆で発信したり、あるいは日本の中でお互いの実践をもっと共有し合ったり（まさに今日の全国大会はそうだと思うが）、あわせて海外などともつながっていくことができればよいのではないか」というもので、発信や広報普及の強化という点がよく話題に出てくる。それに関連したこと、あるいは「こういうことをもっと」ということがあればあわせてお伺いしたい。

安田先生から、大牟田市の例に関して何かあればお願いしたい。

#### ◆安田先生

先ほど紹介したように、本市でもユネスコスクール・ESD について HP、地元紙等を活用し様々な発信の工夫をしている。

これまで幸いに全国各地のユネスコスクールや地域を訪問する機会があった。そこでは各地域の課題をテーマに ESD や SDGs の学習を工夫されて、先生方が子供たちと一緒に様々な実践に努め、持続可能な社会づくりに貢献されていると感じた。

しかし残念なのは、学校の取組が地域の方々に知られていないというケースが多くあり、もったいないと感じた。もっとユネスコスクールの取組を発信して、「持続可能な社会づくりに貢献している」という PR をもっともっとしてよいのではないか。また、日本型ユネスコスクールの良さを世界に発信していくことも必要ではないかと思う。

そこで、各学校や教育委員会の広報啓発の充実、そして全国の実践を可視化するシステム構築の充実など、学校レベルや全国レベルでユネスコスクールの広報啓発の向上をさらに図っていかねばならないと思っている。

#### 【司会者】

先ほど、国際統括官から現在の取組のエッセンスをお話いただいたが、今般始まったユネスコ未来共創プラットフォームなどでも、そうした発信の大きな推進力が生まれていけばさらによいと思った。

「広報普及の強化」という観点が出たが、もう一つの観点として、安西先生や末吉さんから出ている「連携」とか「ネットワークを作る」ということも大事ではないだろうか。日本ユネスコ国内委員会の教育小委員会でも、まさに「ネットワークの機能強化」というポイントが議論されている。

ここは安西先生に、これまで日本ユネスコ国内委員会会長として、教育だけでなく、いろいろ見ていただいた中で、てこ入れしたらよい点などについて、お考えがあったら是非お聞かせ願いたい。

#### ◆安西先生

ネットワークについては今の安田先生の話に通じるが、やはり個々の学校がどう発信していくかということと非常に関係があり、その発信を日本ユネスコ国内委員会の教育小委員会等々で是非バックアップしていただきたい。

特に大牟田市は本当に素晴らしいし、他にも素晴らしいことを行っている学校はあるが、学校によっては「一部の先生は一生懸命だが、なかなか学校の中でも広がらない」という状況も見えなくはない。それについては教材とは言わないが、個々の中学校以上では専科というか科目に入っていないと、例えば「総合的学習の時間や探求の時間を使って」というのは大変素晴らしいが、やはり個々の科目の中で「この活動がベースになって単元を教えられる」というようになっていく必要がある。

欲張りで申し訳ないが、そういうところを是非教育小委員会で応援いただきたい。それによって多くの先生方がユネスコスクールの活動の基本を理解し、それで広がっていくというのが第一だと思う。その上で、大牟田と気仙沼間のようなネットワークはもちろん推進していくべきだが、やはり数だけではなく質のネットワークを作っていくために、日本ユネスコ国内委員会で個々の学校の質を上げていくということを是非御支援いただけないかと思っている。

#### 【司会者】

今日は今後の活動に大きな宿題をいただいたような気がしているが、同時にエールを送っていただき嬉しく思っている。日本ユネスコ国内委員会でも、全国の先生方から教えていただいたことを大切に頑張っていきたい。一方、先ほどから「連携」の話をを出していただいているが、この点についてお聞かせいただきたい。

#### ◆末吉氏

ユネスコスクールに限らず、日頃、学校や先生方の様子を拝見する中で感じたことで、「ユネスコスクールならできるだろう」という期待と共に伝えたいことが3つある。

1つ目は、先ほど申し上げたように、地球規模の気候変動などの問題の切実さをユネスコスクールのネットワークの中で共有いただき、そのために何ができるのかということネットワークを活かして実践に移していったほしいと感じている。もちろん個々の学校でそうした実践することは大事だが、ネットワークの中でできることは他にあるのではないか。そして、その連携こそが活動を力強くするのではないかと思う。

2つ目は、解決のために真剣に頑張りたい、あるいは頑張っている若者・ユースたちが自信を持って活動に邁進できるような環境を整えてあげること。社会に必要な変化を生み出すような「変化の創り手」を、ユネスコスクールが本当に創りだせているのか。その辺りは大きなチャレンジだと思うが、是非期待したい。



3 つ目は、子供たちに「本気になっている大人がいるんだ」ということを実感してもらえるように、まずは大人たちが本気にならないといけない、といつも思っている。そういう意味では、ロールモデルとしての教師の方々の役割は非常に大きく、大事な存在だと思う。まずは「大人こそ真剣に考え実践している姿を見せていく」ということも求められているのではないかと思います。

色々と申し上げたが、変動が激しく、不確実で、複雑で、あいまいで、脆弱な今の時代だからこそ、希望を見失わずに、ユネスコスクールがまさに希望の星になれると思っている。そして、ユネスコスクール以外の学校をも導いていくような良きモデルになれるのではないかと、心から期待しているし、引き続き応援させていただきたい。

発信や広報の強化というのは、広報大使としても責任があると感じ、もっともっと力を入れて頑張っていきたい。

### 【司会者】

日本ユネスコ国内委員会でも、いつも先生方や全国の皆さんと共有して御意見をいただく機会があるとよいと思っていたので、今日は多くの御意見を伺えて嬉しかった。

ご存じのとおり、今年 5 月にはドイツのベルリンを中心にオンラインではあったが ESD の世界会議が開催され、ベルリン宣言が出された。私も参加させていただいたが、世界中の方が同じような思いでつながろうとしていることを強く感じた。また、日本のユネスコスクールの ESD カレンダーや中等教育の取組を少しご紹介したところ、すぐにスコットランドの先生などが日本の取組に関心があるとチャットを送って下さった。また、宮城教育大学の先生方もすでに海外とつながっておられるということで、いろいろなつながりを創っていくことができるとよい。今日もこうしてオンラインで大会が行われているが、オンラインが新しい可能性を生んでいく。そんな新しいニューノーマルな取組も期待できるとお聞きして思っていた。

ユネスコの「Futures of Education」という新しいレポートが 11 月 10 日に世界で発表された。これは 2050 年までの大きな教育ビジョンを描いているレポートと伺っている。そこでは、ESD はもちろん大事な柱となっているが、どのように実践していくかが今後はより重要になってくると思う。今日のお話を伺っていて大変勉強になるとともに、次の一步をどう踏み出すかを皆で考えたいと思った。

お時間は来ているが、最後にもう一言ずつメッセージを頂戴したい。

## 4. 課題および提案

### ◆安田先生

新学習指導要領におけるユネスコスクールの役割というものが、やはり大事だと思っている。新学習指導要領になって ESD の理念が基盤として示されたということは、ユネスコスクールであろうとなかろうと、各学校で ESD の理念のもとに教育活動を進めていかなければならない。ということであれば、ユネスコスクールには他校のモデルとなる役割がある。また、全国のユネスコスクールで行われてきた地域課題をテーマにした教育活動の創意工夫や、地域などと連携した ESD の実践というものは、自信を持って他校に紹介できると思う。そういう面で、新学習指導要領におけるユネスコスクールは、自信と自覚をもって取り組むことが必要だろう。

それから ESD と SDGs について、これも東京大学の及川先生から御指導いただいたことだが、SDGs を目指した ESD を推進することの効果がやはり明確にならないといけない。その考え方の 1 つ目は、SDGs によって自分自身の ESD の活動に新たな意義や価値づけを行うことができ、ESD の活動の目標を明確にすることができるということ。2 つ目は、SDGs は人類共通のグローバル目標なので、それを意識して ESD の活動に取り組むことは、地域に根差した身近な活動が世界につながることであり、地球規模の課題解決に貢献することができるということである。このようなことを改めて確認して、「ESD for SDGs」ということで取組を進めていく必要がある。

自信をもって、そして自覚をもって、皆で連携を図りながらやっていきたいと思っている。

【司会者】 安田先生の「自信をもって」という言葉が心に響いた。

#### ◆末吉氏

私からは、いつも心に留めている言葉「一人の 100 歩よりも 100 人の一歩が世界を変える力を持っている」をお伝えしたい。是非皆様と、これからも共に活動していきたい。

#### ◆安西先生

皆さんがおっしゃる通り、「ユネスコスクールの時代がまたやってきた」ということなので、粘り強く、それこそ持続的に、一步一步歩んでいくことが大事だということを改めて認識させていただいた。

最初に申し上げたように、私はユネスコと同じ年齢で、戦後に生まれ、これだけ長い間平和の中で暮らしてこられたことは本当にありがたいと思っており、こういう時代をこれからも続けてほしいと心から願っている。そのためにユネスコスクールには、子供たちがグローバルイシュー、つまり世界が直面しているいろいろな課題にコミットし、自分たちが主体的に関わりながら学んでいくという場を、今後もつくり続けていただきたい。そして、そのネットワークも是非大きくしていただきたいと心から願っている。

#### 【司会者】

既にお三方におまとめいただいたので申し上げることはないが、是非全国の先生方、地域の皆様、学校関係者の皆様、これからも皆さんで自信をもって、これまで作り上げてきたものを大事にしつつ、また新しいネットワークをもって、もう一度「今ここぞ」という意気込みを感じながらユネスコスクールを進めていくことができればよいと思う。

素晴らしい対談に参加させていただいて一番嬉しかったのは司会の私だと思う。皆様の御協力に心から感謝申し上げ、このセッションを閉じたい。今後も引き続きお願い申し上げるとともに、皆様の御活躍をお祈りして、閉会の御挨拶とさせていただきたい。

# 研究協議会

| 研究協議会            | テーマ                                              | コーディネーター                   |
|------------------|--------------------------------------------------|----------------------------|
| 研究協議会①<br>～第一会場～ | ESD推進による令和の日本型学校教育の構築                            | 石丸哲史（福岡教育大学教授）             |
| 研究協議会②<br>～第二会場～ | 「学び」の先に見える“可視化未来”と自己                             | 伊井直比呂（大阪府立大学教授）            |
| 研究協議会③<br>～第一会場～ | 学校の実践、取り組みを評価し、成果を広める                            | 棚橋乾（全国小中学校環境教育研究会顧問）       |
| 研究協議会④<br>～第二会場～ | ユースの活動と国際交流<br>—Voice of Youth Empowerment の事例から | 公益財団法人アジア・ユネスコ文化センター（ACCU） |

## 【研究協議会①】ESD推進による令和の日本型学校教育の構築



コーディネーター：石丸哲史（福岡教育大学教授）

発表者：島俊彦（福岡県大牟田市立吉野小学校教諭）

指定討論者：手島利夫（東京都江東区八名川小学校校長、  
日本ESD学会前副会長）

令和の日本型学校教育の実現には、ESDの貢献も期待されている。コンピテンシーベースの学習指導要領を着実に実施している大牟田市立吉野小学校に実践報告していただいた。

吉野小学校では、学校の実態に鑑み、国立教育政策研究所によるESDで目指す7つの能力・態度に「課題を見出す力」を加えた。また、「未来を予測して計画を立てる力」とともにこの力を知識・技能の範疇に入れ、残る6つの資質・能力を「思考力・判断力・表現力等」および「学びに向かう力・人間性等」に分類し、学習指導要領との関連を図っている。

このように、学校の実態に合わせた資質・能力の整理は、ESDの効果的な実践と学習指導要領の着実な実施につながり、ひいては令和の日本型学校教育の実現に結びつく。ESDを日々の学習活動の中に無理なく合理的に位置づけることは、ESDの日常化に向けた好例といえる。手島利夫氏には、この「課題を見出す力」を重視している点のほか、指導計画をストーリーマップ仕立てにしている点、地域におけるゲストの巧みな活用を評価していただいた。

### ESDで目指す能力・態度

- ① 批判的に考える力
- ② 未来像を予測して計画を立てる力
- ③ 多面的、総合的に考える力
- ④ コミュニケーションを行う力
- ⑤ 他者と協力する態度
- ⑥ つながりを尊重する態度
- ⑦ 進んで参加する態度

★ 課題を見出す力（本校の実態より）

## 【研究協議会②】「学び」の先に見える”可視化未来”と自己



コーディネーター：伊井直比呂（大阪府立大学教授）

発表者：向井小雪（大阪府立佐野高等学校教諭）

指定討論者：中澤静男（奈良教育大学次世代教員養成センター  
准教授）

大阪府立佐野高等学校は、総合的な探求の時間（LINC：Learning, Idea, Network, Creative）で SDGs を通して地域から世界に通じる課題と可能性を学習しています。実践の特徴は、生徒が関心をもった単一の目標（課題）だけを取り上げて内容を深めていくだけではなく、生徒一人ひとりの考察視点（多様・多角的視点）からアプローチする手法を採っていることです。この結果、現実社会には、ある目標を達成しようとする別の目標とコンフリクトの関係になることに気づきます。この社会の複雑さに直面することでやがて生徒は「何を優先させるべきか」、あるいは「これらジレンマを越える方法はないか」と考察を深めて行きます。結果、自らが問題の当事者でもあることを知り、解決のための一端を担う小さくても確かな活動に参加し始めます。大切なことはその活動によってもたらされる未来の社会を見ながら活動をしていることです（可視化未来）。例えば、店に並ぶ不揃いの野菜が当たり前の社会。何十年後もきれいな砂浜と海にこれからも関わり続けている自分の姿です。



### 【研究協議会③】学校の実践、取り組みを評価し、成果を広める



コーディネーター：棚橋乾（全国小中学校環境教育研究会顧問）

発表者：佐々木哲弥（東京都杉並区立西田小学校主任教諭）

指定討論者：住田昌治（神奈川県横浜市立日枝小学校校長）

ESD の実施・評価・発信について事例をもとに協議しました。事例を発表して頂いた杉並区立西田小学校からは、6年生の「平和」の実践と児童のワークシートを質的に分析した結果や、過去数年の成果から児童の変容とカリキュラムについての報告から、地域参画・未来志向・コミュニケーション能力の向上があり、コロナ禍ではあるが工夫して活動し自己評価が向上している。評価内容として、複数のユネスコスクール間で比較し批判的思考力や表現力の向上が見られたことを示してもらいました。ステークホルダー間の共通理解で評価基準をつくり、評価を含めた発信によって ESD の広がりが実現するのではないかと締めくくりました。その後、横浜市立日枝小学校の住田昌治校長より、子どもの成長を評価し実践と一緒に発信することや、子供、教師、学校をエンパワーする評価、ウェルビーイングやサステナビリティの進捗を評価しながら実践を深めることなどコメントを頂き、まとめとしました。

### 【研究協議会④】ユースの活動と国際交流—Voice of Youth Empowerment の事例から



コーディネーター：公益財団法人アジア・ユネスコ文化センター（ACCU）

発表者：大澤和仁（学校法人市川学園 市川中学校・高等学校教諭  
（千葉県）/Steppers）

吉岡百合奈（広島県山陽女学園高等部教諭/Piece of Peace）



本研究協議会では、ACCU が実施した英語プレゼンテーション・プログラム「Voice of Youth Empowerment」に参加した加盟校生徒チーム 2 組及び彼らの活動を支える教員 2 名にご登壇いただき、若い世代の発信・行動の重要性や交流活動の意義について考えた。

生徒自身が制作した動画を視聴し、彼らの考えや活動について理解を深めた上で、今回の経験を通じた自分たちの変化や他チームとの交流によって得た学びについて語っていただいた。また、先生方からはどのような指導や接し方を心がけ、成長を見守っているかについて伺った。

校外のプログラムも含め、生徒たちに挑戦する機会を提供することで、彼らの持続可能な社会の実現に対する使命感が高まり、若者らしい発想力や行動力の発揮につながる事が明らかになった。さらに、周囲の生徒への好影響が広がっていくこと、国内外の同世代との交流によって様々な価値観に触れ、刺激を受ける中で、自身の課題に立ち向かう姿や視野の広がりといった成長がみられることなどが報告され、若い世代に発信や交流の場を提供することの意義が改めて確認された。

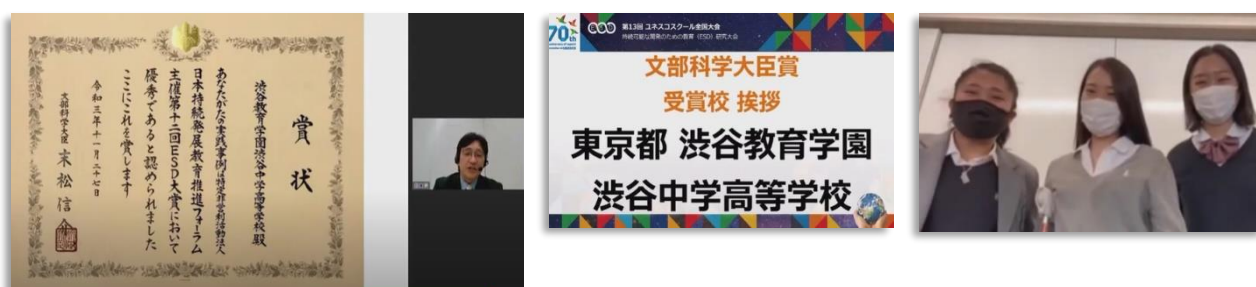
# ESD 大賞表彰式

## 1. 受賞校の発表

- |                |   |                   |
|----------------|---|-------------------|
| ① 文部科学大臣賞      | ： | 東京都渋谷教育学園渋谷中学高等学校 |
| ② ユネスコスクール最優秀賞 | ： | 宮城県気仙沼市立鹿折小学校     |
| ③ 小学校賞         | ： | 福井県勝山市立平泉寺小学校     |
| ④ 中学校賞         | ： | 茨城県牛久市立おくの義務教育学校  |
| ⑤ 高等学校賞        | ： | 広島県立広島国泰寺高等学校     |
| ⑥ 審査員特別賞       | ： | 兵庫県立兵庫高等学校        |

## 2. 賞状の授与・講評

文部科学大臣賞授与：田口康（文部科学省国際統括官）



講評：手島利夫（NP0 法人日本持続発展教育推進フォーラム理事）



文部科学大臣賞の渋谷教育学園渋谷中学高等学校は、日本ユネスコスクールの重要な課題であった国際交流への取り組み。特に自分たちが必要と感じて主体的に進めた取り組みを中心に、生徒の情熱と活躍そして、その中での成長を伝えてくれた。

ユネスコスクール最優秀賞の気仙沼市立鹿折小学校は、海と生きる探究的な活動。年間指導計画に基づいて進めてくれた。

小学校賞の勝山市立平泉寺小学校は、地元の自然環境、社会環境を軸に学びを組み立て、発信の場を工夫した。

中学校賞の牛久市立おくの義務教育学校は、9年間を見通した各学年特色あるテーマを設定することで、子供の成長が伝わってきた。

高等学校賞の広島国泰寺高等学校は、グローバル・課題の発見と解決・イノベーションの3つのキーワードを軸に年間計画を立てて実践をした。

審査員特別賞の兵庫高等学校は、「地域社会の未来を担い世界へ羽ばたく実践者の育成」を目指し、「総合的な探究の時間」を先行実施するなど、意欲的で優れた取り組みであった。

あらためて、25の応募校と授賞された各校の取り組みに大きな拍手を送る。今年は各校にタブレットが導入され、その扱いに多くの時間を費やし苦労も多かったことと思う。

来年はそれをうまく活用し、ESDを通じて学びの本質に挑戦するような優れた実践がたくさん集まることを期待している。

## 閉会挨拶

木曾功（NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム理事長）

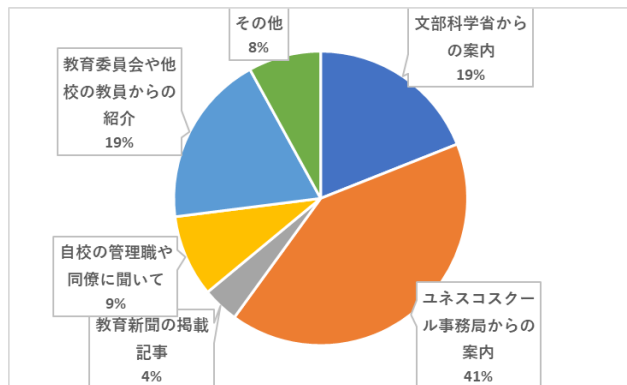


SDGs という大きな 2030 年までの目標の中の ESD という位置づけで考えている。SDGs の教育の分野で何ができるか、を本日参加された先生方も考えるいい機会になったかと思う。

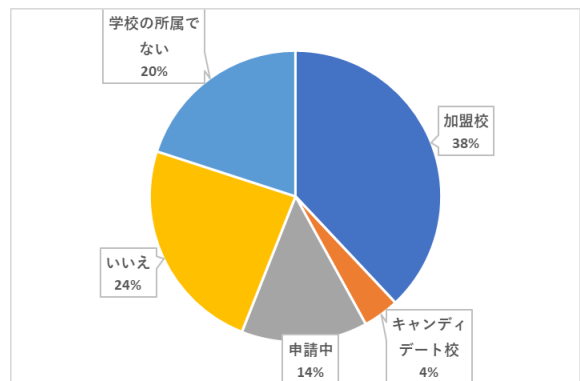
ユネスコスクール関係の先生方のご努力で一層広がりをもって、いい教育ができるよう祈念している。

## アンケート結果

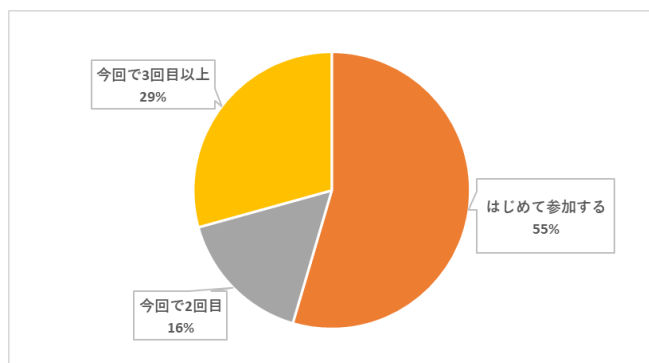
大会認知経路 (MA) n=140



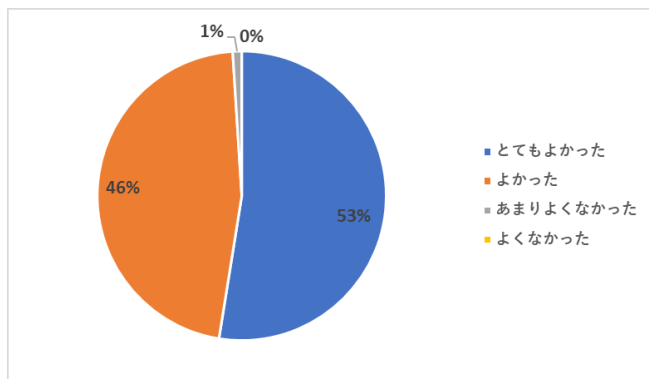
ユネスコスクール登録状況 n=140



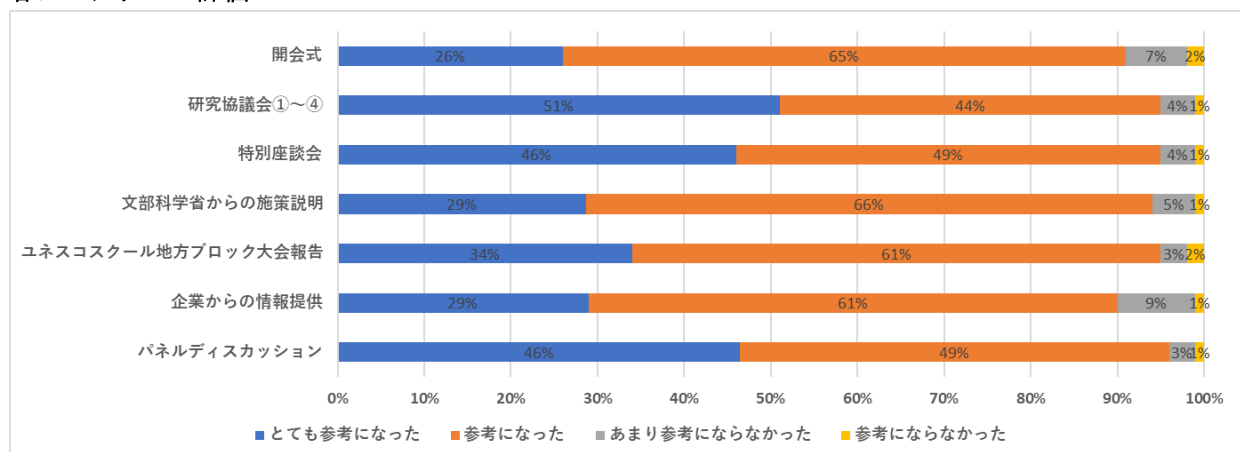
これまでの本大会への参加回数 n=140



大会全体の評価 n=140

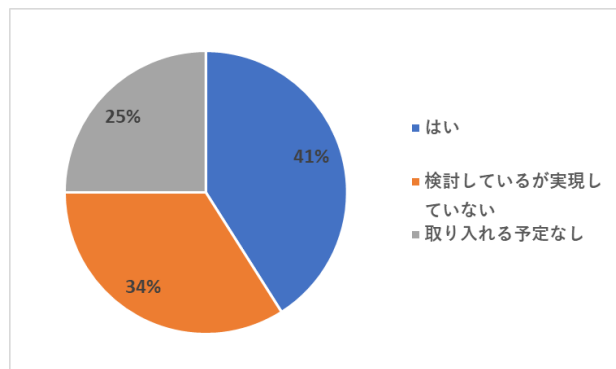


各プログラムの評価 n=140

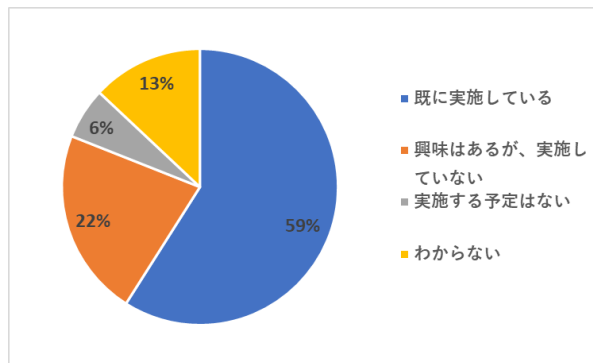




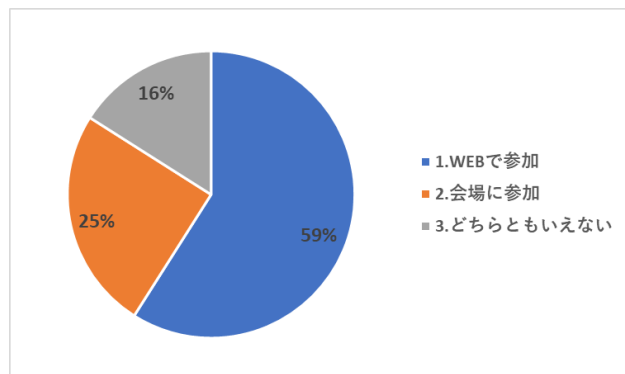
学校での企業と連携した取り組みの実施状況 n=140



学校での SDGs 教育の実施状況 n=140



本大会はWEB 開催となりましたが、次回、あなたが参加するのとしたらいかがですか n=140



第 13 回ユネスコスクール全国大会  
持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会  
報告書

発行日：令和 4 年 3 月 23 日  
発行：NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム